

148.6
E59
⊕

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0 1 2 3 4 5
m m

始



IT3078

(版 四 第)

148.6
E59

文學博士遠藤隆吉著

易の原理及占筮
全

東京 明誠館藏版

序

孔子曰はく占はざるのみと、即ち易の占ひを主とし、孔子の義理を以て解せしを知る。孔子歿して後七十子の徒子夏獨り易傳を得ると稱すれども其の説據なく、今傳ふる所の易傳なるもの亦信するに足らず。劉向敬慎篇を著はし、王肅は執轡篇を述べ、孔子子夏との問答を叙すれども是亦信するに足るものなし。今の時に當りて易の理を見るべきものは上下經と十翼とを措いて他に之を求むべきなし。十翼は雜なりと雖も古雅尙ふるなく、今に當りて易を解せんとするは必ず十翼を窺はざる可らざるなり。緯書は乃ち雜の雜なるもの、十翼と比較すべくもあらず。而して後世の作者斯理を追窮するもの其の

孔門の範圍を脱するや否やは暫く之を措き、何れも陰陽六十
 四卦に關聯して必ず起り來る所のものとすれば則ち易書の
 參考となすべき者極めて廣し。

余十七八歳哲學を好み、斯學の深遠なるを聞き、日夕之を
 耽讀し、僅かに其の一斑を窺ひ、明治二十六年試みに易學源論
 を著はし、以後思ひを此に潛め、攻究涉獵二十餘年、然るに淺見
 寡聞、目を萬分の一にだも曝すこと能はざる也。但一たび斯學
 の思想を組織せんご欲するの念極めて功なるものあり、筆を
 執り之を草するに及び、意に満たざる所極めて多し。殊に六十
 四卦の分類を列する所に於て甚しごなす。漸く年を越え、書肆
 督促最も急、乃ち暫く纏めて一書ごなし、之を世に公にす。嚮き
 に大正二年を以て易ご人生を著はし、余が易に關する說の大

略を叙せり。全頁僅かに四十、易の要ご余が之を解する所以の
 ものとを擧ぐるのみ。而して明年を期して東洋哲學大全を著
 はさんとす。本書を讀まんとするものは併せて此れ等を參考
 せられんことを要す。

揚子己易を著はし、易の理を以て心内の理となし、即ち宇宙
 の理ごなす。唐土の學者乃至日本の儒生に至る迄亦皆遵奉、至
 聖至神の理寓ごなす。余や愚陋未だ此く信ずること能はず
 ご雖も易が支那一切の思想系統に影響せしごは乃ち之を
 知る。支那の哲學、東洋の哲學を研究せんとするもの易を知ら
 ざれば恰も畫龍の點睛を欠くが如く、畫虎の犬に類するが如
 し。豈悲しからずや。

今や日本の帝國、支那文學を研究せんごするの士、其人に乏

しからず。恐くは本書に於て多少の指針となる所あるべし。易學を研究せんとするものも亦其人に乏しからず。乃ち或は其の一斑を最も平易に知了するを得ん。易を信じ、占筮を業とするものは甚だ多し。本書に於て占筮法の一般を知了し、併せて占筮の原理を解釋するを得ん。此く廣大なる關係あるにも拘はらず、本書の極めて、不完全なるは余が最も遺憾とする所なり。識者幸に示教を惜まず、余をして斯學の開發を成さしめられんことを。

大正五年十一月

於巢園學舎

文學博士 遠藤隆吉 識

易の原理及占筮目次

總論

第一編 易の思想系統

第一章 八卦の成立

第一節	自然と神話	三
第二節	相對の原理	六
第三節	二原理の符號	九
第四節	八卦の成立	一〇
第五節	乾坤六子の說	一六
第六節	八卦の性質	一七

次

第七節 重卦の成立……………三三

第二章 卦畫の意義……………二九

第一節 八卦と六十四卦……………二九

第二節 上下二卦の關係……………二九

第三節 六爻は下より上に向つて昇進しつゝある事……………三一

第四節 天地人に則ると……………三一

第五節 陰位陽位……………三一

第六節 各爻の社會的位置……………三三

第七節 一爻一卦の象あると……………三六

第八節 承乘應比據互體約象……………三七

第九節 卦形……………四〇

第十節 卦爻は變する意味を含む……………四一

第十一節 爻と卦との關係……………四七

第十二節 三百八十四爻の一般的性質……………四八

第三章 易の經典……………五一

第一節 易經の體裁及び作者……………五一

第二節 六十四爻の順序……………五二

第三節 卦綜と卦錯……………六〇

第四節 三易の文……………六四

第五節 上下經の用字法……………六七

第六節 易經は字書なりといふ說……………七一

第七節 經典の權威……………七七

第八節 十翼の文……………七九

第九節 十翼非孔子之作……………八二

第十節 象象の別……………八九

第十一節 象象の時代……………九三

目

次

三

第四章 易の思想と易書……………七

第一節 易の根柢……………七

第二節 卦辞爻辞……………九

第三節 十翼……………九

第四節 易關係の思想……………一〇

第二編 易の哲學……………一〇

第一章 陰陽論……………一〇

第一節 陰陽と人事……………一〇

第二節 陰陽と矛盾相對……………一〇

第三節 易と老子(一)……………一〇

第三節 易と莊子(二)……………一〇

第四節 易と太極圖說……………一一

第五節 易と陰符經……………一三

第六節 陰陽思想の應用……………一六

第二章 六十四卦の哲學……………一七

第一節 一卦の意味……………一七

第二節 六十四卦の人生觀……………一八

第三節 六十四卦の名稱……………一九

第四節 六十四卦の分類……………三五

第五節 順境……………四七

第六節 愛撫……………六一

第七節 交際……………六三

第八節 教育……………六八

第九節 家庭……………六九

第十節 結婚……………一七二

第十一節 旅行……………一七四

第十二節 牽制……………一七五

第十三節 刑罰……………一七六

第十四節 戰爭……………一八〇

第十五節 訴訟……………一八一

第十六節 逆境……………一八四

第十七節 進退……………一九九

第十八節 社會救濟……………二〇四

第十九節 努力……………二〇八

第二十節 修養……………二一〇

第二十一節 六十四卦分類表……………二一九

第二十二節 易の文……………二二三

第二十三節 上下經の八卦數……………二三四

第二十四節 經解……………二三五

第二十五節 王弼の易應用論……………二四一

第二十六節 張孟劬の易論……………二四二

第二十七節 六十四卦の占筮的解釋……………二四三

第三章 十翼の思想……………二五七

第一節 記述法……………二五七

第二節 象の哲學……………二五六

第三節 象の哲學……………二六〇

第四節 繫辭の哲學……………二六〇

第五節 說卦の哲學……………二七一

第六節 文言の哲學……………二七三

第七節 八卦の象……………二七九

第八節 八卦の順序……………二八二

第九節 六十四卦貞悔生成の説……………二八五

第十節 之八に就て……………二八七

第十一節 易の年代に就て……………二九三

第十二節 天與神物……………二九八

第十三節 考變占……………三〇三

第四章 易の應用……………三二一

第一節 相談對手……………三二二

第二節 倫理的唯心論……………三二三

第三節 政治思想……………三二五

第四節 易の有形的應用……………三二七

第五節 陰符經……………三三九

第六節 萬物數の説……………三四九

第五章 易と他の哲學系統……………三五三

第一節 易と各種の思想……………三五三

第二節 易と五行説……………三五四

第三節 易と干支及び人相……………三五九

第四節 十干十二支の説明……………三六一

第五節 易と老莊哲學……………三六六

第六節 易と河圖洛書……………三六九

第七節 易とピユタゴラス哲學との異同……………三七四

第三編 占筮論……………四〇一

第一章 占筮法……………四〇一

第一節 緒論……………四〇一

第二節 過揲說……………四〇三

第三節 掛扠說……………四〇七

第四節 三十六變說……………四一〇

第五節 四十八策說……………四一四

第六節 第二第三不掛說……………四一八

第七節 五十策の所原(一)……………四一九

第八節 五十策の所原(二)……………四二七

第九節 五十策の所原(三)……………四二九

第十節 五十策の所原(四)……………四三四

第十一節 五十策の所原(五)……………四三六

第十二節 過揲と掛扠と何れを取るべきか……………四四五

第十三節 三十六變說を排す……………四四九

第十四節 四十八策說を排す……………四五二

第十五節 占筮無用說……………四五四

第十六節 筮法の價值……………四六五

第十七節 筮法は何に象るか……………四六七

第十八節 筮の器……………四七六

第二章 占驗論……………四八一

第一節 占驗法一般……………四八一

第二節 占驗諸例……………四八三

第三節 周の史、陳敬仲が齊に興ることを占す……………四八八

第四節 梅花心易要領……………四九七

第三章 占筮法の原理……………五〇四

第一節 占筮の原理(一)……………五〇四

第二節 占筮の原理(二)……………五〇五

第三節 占筮の原理(三)……………五〇七

目次

第四節 占筮の根底…………… 五八

目次終

易の原理

總論

文學博士 遠藤隆吉 著

鄭玄曰はく、易は日月なりと、然れども鐘鼎古文には蟲形に造る。乃ち蜥蜴の象形文字となすを以て當れりとす。此れ易の字の第一義なり。蜥蜴の性たるや、日に色を變ずると數回に及ぶ。故に易の字を以て「變化」を意味することゝなせり。此れ易の字の第二義なり。而して今所謂易哲學は「變化」を以て根柢となす所の一種の思想系統なるが故に易の字を以て之を表はすこととなせり。之れ易の字の第三義なり。易の字一度作られてより次第に第二第三の意味をも包含することゝなれり。若し易の字を讀むで簡易の易となす如きは今論する限りに在らず。

易なる一種の思想系統を論述するを以て主題となすが故に、易經の體裁、作者、

傳來等は之を後に譲り、先づ易の思想系統其者を論述し、而る後機を見て易經に及ばんとす。易經は易の文字に見はれたる者に外ならざればなり。讀者も未だ嘗て自身手を觸れしことなき易經に關する講義を聞くも殆んど理解する能はざるべし。恰も一種の科學書は全体を讀み了りて後始めて其意味を理解し得べく、始めより其定義を聞くも極めて漠然たる者なる如し。易は宇宙の變化を示めす所の一種の思想系統なることを注意し置き、直ちに思想其者を論述せんと欲す。然るに易なる思想系統を論述するに當り如何なる書に據るべきか。言ふ迄もなく、易經其者に據らざるを得ず。易經の註釋、易緯、乃至易に關する述作は汗牛充棟言ならず、中には易經以外の思想をも包含するものあり。然れども易の思想系統を論述せんとする時は必ずや易經を以て中心的典據となさざるを得ず。今の易經が果して善く易の思想系統を言ひ表はして且つ餘蘊なき者なるか。知るべからざる所に屬す。從て、吾人が、易の思想系統を論述せんとするも、易經を通じて見たる者に外ならざるなり。

同く易經を通じて見たる者と雖も、解釋の方法は人に由りて一ならず。或る者

は遙か想像を逞ふし以て易の微意の在る所を索らんとし、或る者は易經の文字に執着し、殆んど想像の羽翼を張らざらんとす。吾人は易經を以て典據となし之を各國の神話と進化論心理學等に照し、其上に合理的なる想像を弄するは万己むを得ざること信ず。故に看る者或は之を以て余が一己の易觀となす者あらん。又或は之を以て餘り遙か想像に耽り易經の意に背馳したりとあす者あらん。何れも然かあるべき批評にして余が辭する所にあらず。易の典籍の多き殆んど他經に冠たり。余が目を洒らせし所の者は其の數十分の一に過ぎず。余は此の易經を以て完全なりとなすにあらず。只だ易の思想系統の一般と易經の人生と密接なる關係ある所以とを論述せんとするに外ならず。讀者之を諒せよ。

第一編 易の思想系統

第一章 八卦の成立

第一節 自然と神話

凡そ自然界に於て最も著明なるは天地日月晝夜の如き相對的なる現象なり。去れば如何なる社會に於ても天地日月相對の神話あり。タイロー氏曰はく

凡ての國に於て晝は夜に繼ぎ天は地を覆ひ、日月は交る、天を運り、而して日の出に先ちて曙あり。故に凡ての神話に於て晝と夜、天と地、日と月、日と曙は男と女、或は戀人、或は夫妻、或は兄弟として表さる。而して日は東方に於ける彼の室より出で來る花婿として、曙は頬を赤らませたる花嫁として表さる。は自然のことなり。故に神話にして日と曙との戀愛を言はざるもの稀なり。されどかゝる神話は必ずしも原始的のものにあらず。

印度のウシヤス (Ushas) イランのウシヤン (Ushanti) 希臘のエーオース (Eos) 羅馬のオーロラ (Aurora) リシューアのオーソツラ (Auszra) 等は皆字義上曙を指すものにして希臘羅馬にては之を人に擬し印度にては神とせり。されど共通なる神話は存在せず。^(Taylor, The Origin of the Aryans, p. 311.)

又云はく

彼等(アリアン人及び其他の多くの人種)は皆蒼々焉たる天を以て最上の神

となし且つ之を崇拜せり。其の名は種々にして印度人はヅアルーナ (Varuna) 希臘人はツオイス (Zeus) ケルト人はカミュロス (Cannulos) チュートン人はウオーデン (Woden) と呼べり。彼等は又天の配たる地を母として拜せり。印度人は之をプリトヒヴィ (Pṛithivī) と呼び、希臘人はゲーア (Gaia) 又はデメーテル (Demeter) チュートン人はネルサス (Nerthus) フリッガ (Frīgga) 又はジールド (Jordd) と呼べり。^(ibid., p. 308.)

天地日月晝夜の如きは何れの社會に於ても兩々相對する者として觀察せられ、且つ神として崇拜せられたり。然かも人事界にて經驗する所の性を附し、男性となし、女性となし、又は父性となし、母性となす。此れ等相對の諸神より單に、相對の性を抽象して思考するが如きは遙か後世のことに屬す。支那に於て天地併びに万物は古代皆神視せられたり。舜典に云はく、

肆類于上帝、燿于六宗、望于山川、徧于群神。

又禮記に云はく

柴を泰壇に燔きて天を祭る。泰折に瘞埋して地を祭る。騂犢を用ふ。少牢を祭

昭に埋めて時を祭る。坎壇に相近して寒暑を祭る。王宮に日を祭る。夜明に月を祭る。幽宗に星を祭る。雩宗に水旱を祭る。四坎壇に四方を祭る。山林川谷丘陵の能く雲を出し風雨を爲し怪物を見すを皆神と曰ふ。天下を有つ者は百神を祭る。諸侯は其の地に在るをば則ち之を祭る。其の地を亡へるときは則ち祭らず。禮記の書は孔子の舊にあらざるべきも、其の習慣は古代に存せし者なるべし。何んぞあれば記者が想像的に筆の上にて習慣を作り出すが如きは實際出來得べからざるとなればなり。支那の古代は多神教(polytheism)なりき。其中に於て天地は最も貴き者とせられたり。此くの如くして天地を以て相對的となすは多くの社會に於て見る所の現象なれば支那人が天と地とを以て非常なるものとし、神として崇拜せしも亦異むに足らざるなり。然るに相對といふことに着目して宇宙を観察する時は寒暑あり、日月あり、晝夜あり、宇宙の萬物は恰も兩相對する者の如く、然り、此れ支那人種の祖先の腦中に浮び來りし所の思想なり。

第二節 相對の原理

此く種々の事象を観察し相對の性其者を抽象したるは實に易哲學の起源なり。易は相對なる二性を區別し、一を積極的とし、一を消極的とし、名けて陰と陽といふ。陰陽なる概念は極めて概括的にして性質、物體、狀態、位置等悉く之を包含せざるなし。例へば強弱は性なり。然るに陰陽の中に包含せらる。榮枯、盛衰、晝夜、寒暑の如きは狀態なり。然るに是も亦陰陽の中に包含せらる。陰の氣と云ひ、陽の氣と云ふ。形而下の質料なり。男といひ、女といふ。個人を指す。何れも陰陽の中に包含せらる。然るに陰陽の概念は單に相對せるといふことを以て主要なる要素となし。此の要素さる発見せらるゝ所には其性質なると狀態なるとを問はず。又其の物體あると位置なるとを問はず。一様に之を包容せしめたり。由是觀之、陰陽の概念は極めて概括的なり。

更に一面に於て陰陽なる文字に就て注意すべきは單なる反對と矛盾的反對とを包含するとは是れなり。單なる反對とは何ぞや、第三者を許す場合是れなり。例へば黒と白との如し。其の中間には灰色あり、褐色あり、赤あり、紫あり、數多の第三者の介在するものあり。之れを單なる反對と謂ふ。矛盾的反對は之と異なり、第三

者を許さざるものなり。例へば左手と右手、毒蛇と無毒蛇、有形物と無形物と云はんが如き是れなり。其兩者の何れにも屬せざる第三者あることなし。一切の蛇は毒あるかなきか何れにか分屬せざるを得ず。毒あるにあらず、毒なきにあらずといふが如き蛇の存在を認むること能はず。論理思想の明かならざりし古代にありて陰陽ある概念が漠然此等兩者を包含せしことは決して怪むに足らざるなり。況んや陰陽なる概念は社會の傳説として古代より次第に發達し來れるものなれば其概念の明了に識別せられざりしこと固より其處と謂ふべし。陰陽ある概念に對する此等兩種の注意は周易を研究せんとするもの、忽かせにす可からざる所なり。

此く漠然たるにせよ、易の思想は兎に角陰陽二者を立て、以て二原理となし、宇宙は是れ等兩者に由りて支配せらるることとあらずと同時に此れ等兩者は恰も男女の如きものなりとなせしと明かなり。希臘のロクロスにも亦之に類する思想あり。即ち男性を以て理想となし、女性を以て資料となし、第三者は其間に生まるることなし。而して周易に於ても陽は男性にして精神的、陰は女性にして物質的なりと

するの思想あり。(十聖哲) 去ればロクロスの思想は易の概念に該當する所ありといふべし。此外に易の陰陽には法則の意味あり、性質の意味あり、又位置の意味あり。包含する所極めて多し。然るに兎に角陰陽が「相對」と云ふことを以て其中心となすは最も注意すべき所なり。

第三節 二原理の符號

易の作者は陰陽二原理を表はすに、☯と☷とを以てせり。即ち二原理の符號(Symbol)なり。何故に此符號を撰びしかといふに陽は奇數、陰は偶數、陽は男性にして剛、陰は女性にして柔なればなり。☰は剛の如く思はれ、☷は柔の如く思はる。吾人の感情に於て然り。又☱は奇、☲は偶ありとは其の形に於て已に然るなり。兎に角支那思想に在りては穩かなる所あり、二者は符號なり。易の作者が此等兩符號に對するときは宇宙一切の現象は歴々として其中に表はれ來るが如き感ありしなるべし。晝夜寒暑日月星辰は固より、男女、君臣、夫婦、父子、君子、小人に至る迄皆☯と☷とに由りて代表せらる。乃至は上下、内外、左右、前後の如き

榮枯盛衰禍福善惡の如き亦皆一〇とに由りて代表せられざるはなし大なる所に於ても一〇とあるのみ其中の小部分に於ても亦一〇とあるのみ宇宙何れの方面と雖も何れの部分と雖も皆一〇とならざるなきなり此れ實に易の主要なる所にして其の根本思想なり去れば陰陽は普遍的法則なり此く普遍的法則のあるありて以て一切現象を司配し居るが故に未來の現象をも亦以て卜知すべきなり

第四節 八卦の成立

然るに個々の現象に就て之を見れば陰の性もあり陽の性もある如し例へば山は高き所より見れば陽なれども其地上に在る所より見れば陰なる如し水は其の強き所より見れば陽なれども柔なる所より見れば陰あり火は其の明なる所より見れば陽なれども其の中心の暗き所より見れば陰なり去れば單に一〇とこのみにては不十分なり何等か方法を講せざる可らず此れ易の作者の腦中に浮びし所の進動にして之を表はすの法は他にあらず之を堆積するにあるのみ陰の上に各々陰と陽とを堆積し陽の上にも亦各々陰と陽とを堆積し二爻

なる四卦を得各四卦の上又陰と陽とを堆積し三爻なる八卦を得(卦を積むに當り凡て下より上にす此れ普通の人情より來りしものにして當然のこなり)二爻四卦に止めずして三爻八卦に至り四爻十六卦に進まずして八卦に止る者其故なくむばあらず蓋し左の如し

(イ)三なる數は最も人情に適し居ること一體奇數は偶數よりも愉快なる感情を與ふる者なりされば日本の俗間に於ても贈答には多く奇數を用ふ正月の繩は七五三を用ふ奇數は不可分の觀念を起し統一の觀念を起す偶數は之に反して可分の觀念を起し支離滅裂の觀念を起す此れが爲めに奇數を好み偶數を嫌ふなるべし同じく奇數の中にも三なる數は最も簡單にして五七等よりも最も規則正しき觀念を起す奇數の中にも三なる數は最も人情に投じ居るを見る此れが爲め周易は三爻にて止めたり要するに三の數に重きを置きしなり

(ロ)天地人三才に則ること天地人三才は支那古代に於ける標準概念なり換言せば一般に天地人三才を以て宇宙間に於ける主要なる對象となしつゝ

ありしなり。今三爻は天地人三才を代表するものと見ることを得、少なくとも



も三個の標準概念に依りて影響せられ、三に重きを置き遂に三爻を以て満足するに至れるものとも想像するを得べし。

(八)三爻ならば陰陽に勝つか、陽陰に勝つか、二者同一といふことなし。易の思想に依れば宇宙一切の事は陰か然らざれば陽なり。三爻ならば陰か陽か何れかの性質が強きを示し、従つて易の根本思想に合し居るなり。

(二)八なる数は程よきこと。十六は餘りに多きに過ぐ。易の單位を以て十六となす時は、其數餘りに多きに過ぎて取扱上の不便を感ず。然るに八卦ならば所謂手頃にして極めて便利なり。是又易の作者をして八卦を以て満足せしめし一條件ならざるべからず。

(ホ)八卦は宇宙間の重なる現象を示すに足ること。宇宙間の重要なる現象は八卦に依りて略ぼ現はされ居るを見る。本より宇宙には判然たる八卦の別なければ何人が見ても妥當と思はるといふにはあられども、兎に角易の作者は八卦生成の後、是を以て自然現象の重なるものを代表せしめんとせり。而かも自然現象の重なるものは實際是によりて代表せらる。是又易の作者をして八卦を以て満足するに至らしめし一原因からざる可からず。天、澤、火、雷、風、水、山、地、是れなり。

乾鑿度に云はく、物有始、有壯、有氣、故三畫而成乾也。是れ古來の傳説なれども解釋となすに足らず。余が以上の説明は謂はゞ經驗說にして易を以て合理的に作成せられしとなす。論者の到底首肯する能はざる所なり。余は易の作者を以て聖人にあらずとなす。易は經驗的に次第／＼に作られたるものとなすなり。陽を剛となし、明とかじ、人に在りては君子となし、善人となし、男となし、父となす。物に在りては上となし、外となす。陰を柔となし、暗となし、人に在りては小人となし、悪人となし、女となし、母となす。物に在りては下となし、内となす。爻を積むで卦をなし、其の性を定むるには此れ等の「加減總計」を以てす。陰一陽二、又は陽一陰二の如き時は其一なるものを以て主となし、其の爻の性に從ひ陽性の卦となし、又は陰性の卦となす。或は陰を小といひ、陽を大といふ。故に泰の象に「小往大來」とあり。王輔嗣の類例に曰はく、卦有小大也。（明卦通）隨て小の卦又は大の卦とも謂ふ可きなり。兎に角一を以て全體の性を定む。其の故何んぞや二說あり。一は陽を君となし、陰を民となす。一君二民なるものは尙びて陽卦とし、二君一民あるものは賤みて陰卦となすものなり。即ち繫辭傳に曰はく、

陽卦は陰多く、陰卦は陽多し。其の故は何ぞや。陽卦は奇、陰卦は偶、其の德行は何ぞや。陽は一君にして二民、君子の道なり。陰は二君にして一民、小人の道なり。と。二は陰は陽を求め、陽は陰を求め、求めらるゝ者少ければ珍重せられて求むる者を司配すとなすものなり。王輔嗣の略例に云はく、

夫れ少は多の貴ぶ所なり。寡は衆の宗とする所なり。一卦五陽にして一陰なるときは則ち一陰之が主と爲る。五陰にして一陽なるときは則ち一陽之が主と爲る。夫れ陰の求むる所の者は陽なり。陽の求むる所の者は陰なり。陰苟くも一なれば五陽何ぞ同じうして之に歸せざるを得んや。陽苟くも隻なれば五陰何ぞ同じうして之に従はざるを得んや。故に陰爻賤しと雖も一爻の主と爲り得るは其が至少の地に處ればなり。

是れ六爻の卦に付て言へるなれども三爻の卦に付ても亦同じ。二說共に一理ある者と謂ふべし。然れど第一說の如く「君民」にのみ限るは穩かならず。故に後說を以て可となす。少き者は多き者の望む所となり、其の精神を司配す。故に少き者の性が一卦に於て顯著 (Predominant) の如く思はるゝなり。從て之を以て八卦の

性となすなり。

以上の方法にて八卦の成立を説明するは所謂加一倍の法にして邵康節朱子等の取る所なり。余は十翼に「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」の句ある以上は此の説の必ずしも架空の想像にあらざるを信ず。又之を心理作用に徴するも三爻の堆積は二爻の後に在り、二爻の堆積は一爻の發明に伴ふこと殆んど疑ひある可らず。然れども他の一面には説卦傳に據つて乾坤六子の説をなす者あり。

第五節 乾坤六子の説

乾坤六子の説より八卦成立の由來を説く者あり。此説に據れば先づ陰陽二畫を設け、積んで三陽☰三陰☷となし、之を乾坤と謂ふ。乾坤を以て卦の父母とかし、震巽坎離兌艮の六卦を生ず。因りて之を重ねて六十四卦となす。是れ説卦傳中に在る乾坤六子の説より割り出したる者あり。(河田孝成著周易新疏別錄)此説明は説卦傳に據るといふ點に於て將又父母を主とする道德的家庭的の意味あるといふ點に

於て取るべきが如くあれども八卦の成立を以て然かく合理的となすは發明の心理に反するが如し。故に余は八卦の成立は全く加一倍の法に依る者となし、彼の乾坤六子の説の如きは八卦成立の後に附會したる者なるを信ず。然れども何れも想像の説にして確實なる材料あるにあらざれば何れども斷言し難し。但だ學者の信する所如何に在るのみ。

第六節 八卦の性質

八卦は易の根柢なり。之を明かにせざれば易の思想は全く解す可らず。故に今八卦の性質を明かにし。(朱子は之を卦徳と謂ふ)自然現象の何に當るや。(之を卦象と謂ふ)を述べんとす。
一、乾☰は陽のみにして、剛の極なり。如何なる方面より見るも陰性あるなし。故に其の徳を健となし、象を天となす。其の他の象を擧ぐれば
馬、首、圓、君、父、玉、金、寒、氷、大赤、良馬、老馬、瘠馬、駁馬、木果、
二、坤☷は陰のみにして柔の極なり。毫も陽性なし。正さに☷と相對せる者。故に其の徳を順となし、象を地となす。其の他の象を擧ぐれば

牛、腹、母、布、釜、吝嗇、均、子母牛、大輿、文、衆、柄、黑(地)

三震 ☳☳ は一陽二陰の下にあり、陽は動き、陰は静かなり。下にある陽は昇りて上に行かんとす。故に一陽二陰の下に在りて昇らんとして動きつゝあるものと見るべし。陽は此の卦の主たり。故に此の爻に付て義を取り、卦徳を動となし。卦象を雷となす。其の他の象を擧ぐれば

龍、足、玄黃、大塗、長子、決躁、善鳴(馬)、作足(馬)、的類(馬)、反生(穆)、健、蕃鮮、

又此の卦は坤の體中に乾の初爻來りて生ず。●者と見るを得、困りて之を長男となす。說卦に云はく、

震一索而得男。故謂之長男。第十章

四巽 ☴☴ は一陰二陽の下にあり。陰は静かにして二陽に従順なり。故に又二陽の下に入り居る者と見るべし。故に其の徳を入となす。其の象を風となす。故に又聯想によりて、命令の意あり。其の他の象を擧ぐれば、

雞、股、木、長女、繩直、工、白、長、高、進退、不果、臭、寡髮(人)、廣顙(人)、多

白眼(人)、近利市三倍(人)、躁卦、

此の卦は乾の體中坤の初爻始めて入り來れる者と見るを得、困りて之を長女となす。說卦に云はく、

巽一索而得女。故謂之長女。

五坎 ☵☵ は一陽二陰の間にあり。陽は善、陰は惡、惡中にあり。故に其の徳を陷るとなす。外柔にして内剛、故に其の象を水となす。凡て液體に關すること、險阻に關することは此の中に包含せらる。其の他の象を擧ぐれば、

豕、耳、溝瀆、隱伏、弓輪、加憂(人)、心病(人)、耳痛(人)、血卦(人)、赤(人)、美脊(馬)、亟心(馬)、下首(馬)、薄蹄(馬)、曳(馬)、通、月、盜、堅多心(木)、

此の卦は坤の體中、乾の中爻來れるものなりと見るを得、困りて之を中男とあす。說卦に云はく、

坎再索而得男。故謂之中男。

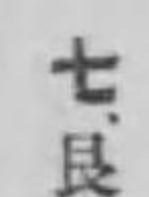
六離 ☲☲ は一陰二陽の間に附着し居ると見らる。故に其の徳を麗となす。火は外明にして内暗し。試みに蠟燭の火炎を窺ひ見れば周圍は赤けれども内部は黒し

故に其の象を火となす。凡て「見」明等の意は此卦に在りとなす。其の他の象を擧ぐれば、

雉、目、日、電、中女、甲冑、戈兵、大腹(人)、乾卦、蟹、蚌、龜、科上槁木

此の卦は乾の體中、坤の中爻來りてなれる者と見るを得、因りて之を中女となす。説卦に云はく、

離再索而得女。故謂之中女。


七、艮  は一陽二陰の上に在り、陽は動く者なれども更に行く所なし。超然として止る。其の徳を「止」となす。又此の卦は坤地の上に高き者ありと見るべし。故に其の象を山となす。其の他の象を擧ぐれば、

狗、手、徑路、小石、門闕、闍寺、指、鼠、黔喙之屬、堅多節(木)、

又此の卦は乾の體中、坤の上爻來り成せる者と見るを得、因りて之を少男となす。説卦に云はく、

艮三索而得男。故謂之少男。

八、兌  は一陰二陽の上に在り、陰は小人、下に在るべき者、而して上に在り。故に

悦ぶ。故に其の徳を説トコナフとなす。故に凡て口舌言語に關することは此中に包含せらるゝとす。  の正反對、故に其の象を澤となす。其の他の象を擧ぐれば、

羊、口、少女、巫、口舌、毀折、附決、剛鹵(地)、妾

此の卦は乾の體中、坤の三爻來り成せる者と見るを得、因りて之を少女となす。説卦に云はく、

兌三索而得女。故謂之少女。

此れにて説卦傳中に在る八卦の象は盡きたるなり。此外荀爽集解に列せられたる象あり。今略す。乾坤を父母となし、其の餘の六卦を六子となす。何楷曰はく、索とは求むるなり。乾と坤とが相互に求むるをいふ。即ち坤が先づ乾に求め、而して乾が之に應すれば陽が陰中に入る。是れ陰が陽を包みて男を成す。又乾が先づ坤に求めて坤が之に應すれば陰が陽中に入る。是れ陽が陰を包みて女を成すあり。

是れ等の卦象が古代の傳説として一般に信せられしは、上下經中此れ等の卦象を取りて以て辭を繫けし者多きを見て知るべし。但だ一切の卦象は一人の手



天雷

大過



地火

晉



火地

明夷



山澤

咸



風雷

恒



山天

遯

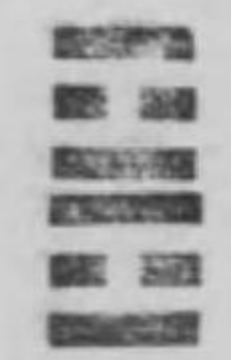


風澤

大過



坎



離



雷天

无妄



天山

大畜



雷山

頤



火山

賁



地山

剝



雷地

復



澤地

臨



地風

觀



雷火

噬嗑



地雷

豫



雷澤

隨



風山

蠱



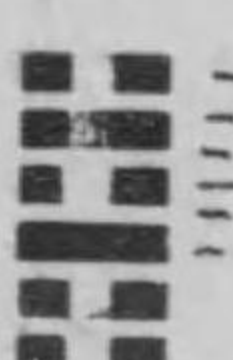
火天

同人



天火

大有



山地

謙



澤天

履



天地

泰



地天

否



水地

師



地水

比



天風

小畜



水火
未濟



澤風
中孚



兌



火雷
豐



艮



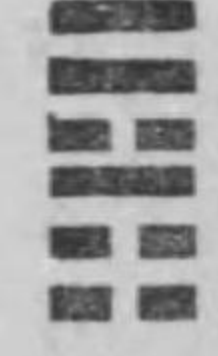
山雪
小過



水風
渙



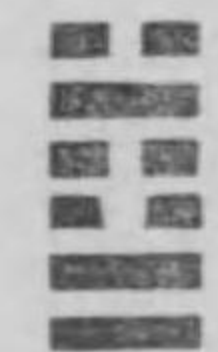
山火
旅



山風
漸



火水
既濟



澤水
節



巽



澤雷
歸妹



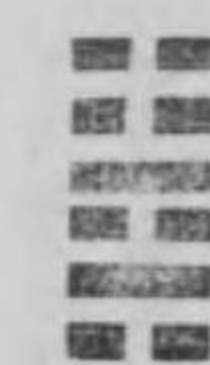
火澤
革



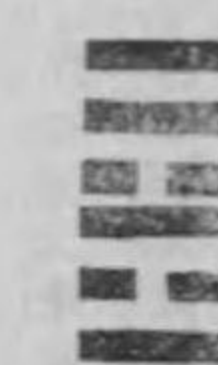
風地
升



天澤
夬



水雷
解



火風
家人



風火
鼎



水澤
困



風天
姤



澤山
損



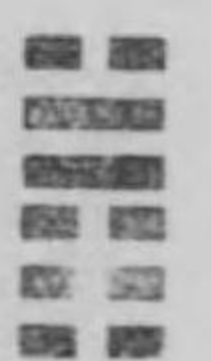
澤火
睽



震



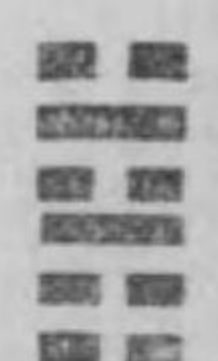
風水
井



地澤
萃



雷風
益




山水
蹇

然らば重卦は何人に始まりしか、一言以て之を蔽へば遯として其年代を知る可らず。但だ書經に龜從筮從の句ある以上吾人は夏殷の頃已に其存在せしことを信せんとす。然れども之れに付ては異説あり。王弼は伏羲なりとなし、鄭玄は神農なりとし、孫盛は禹なりとし、司馬遷、班固、楊雄等は文王なりとなす。伏羲氏説を執るもの、證とする所に曰はく連山歸藏周易の名ありて連山は伏羲氏の易、歸藏は黄帝氏の易と稱せらる。而して各六十四卦を備ふるが故に重卦は伏羲氏の時にありといふべしと。又曰はく、繁辭傳に云はく、昔者庖犧氏の天下に王たるや仰いで、是則ち象を天に觀……結繩を作りて網罟となし、以て田し、以て漁す。蓋し之を離に取る。離は重卦なれば重卦の伏羲に始まりしと疑ふ可らずと。又曰はく、淮南子に云ふ、伏羲之れが六十四變をなすと。重卦の伏羲に始まりしを見るべしと。何れも確實なる論據あるにあらず。後世の憶説のみ。吾人は伏羲氏神農氏を以て時代の名となし、而して夏殷以前に於て、殊に支那民族のバミール地方に生存せし頃に於て己に其社會内に存在しつゝありしことを信せんとするなり。

第二章 卦畫の意義

第一節 八卦と六十四卦

八卦の性質は已に之を述べたり。八卦已に意味ある以上は六十四卦も亦各々或る意味なきこと能はず。例へば  坎、震、の如く坎震を重ぬるときは水と雷との併發せる状態として雷雨の象なりと觀察し得べきが如し。卦德より見れば上卦は陷、下卦は動なる故、動いて峻難に陷むる者とも觀察し得べし。一の重卦に付て熟視し磨る時は種々の聯想の起り來るありて何んとなき意味ある如く感ずべし。去れば六十四卦は皆一種の意味あり。此意味は始めて六十四卦を見たる人には何んぞ解釋せらるべきかは分らざれども、此には易經を通じて見たる意味を述べんと欲す。余り牽強附會の如く、又或は餘り幼稚に見ゆる者あるべきも暫く記して、以て參考に供す。

第二節 上下二卦の關係

上下二卦を其卦象、卦徳の上より觀察する時は前述の如き面白き意味を發見することを得べし。今然ら上下二卦の關係を考ふる時は左の如き意味の伏在するを感すべし。



(一)上卦は外、下卦は内の如く感すべし。此れ易

の爻を積むや、下より上にするがためあり。

(二)上卦と下卦とは互に相軋轢若しくは交渉しつゝあるが如く感せらる。

(三)下卦は來り、上卦は行き去る如くに感せらる。

(四)更に他の一面に於ては上卦は上りし如く下卦は降りし如く感せらる。

此れ等は上下兩卦の關係に付て易の作者の思ひ浮びし所の思想なりとす。此れ等の思想を以て上下二卦の卦徳、卦象を比較する時は種々の意味を現はすべし。此の意味又は後に述べる如き意味より六十四卦の名稱は定められたるなり。尤も其等名稱は必ずしも動かすべからざるものにあらず。單に周易の作者の腦中に浮び出でし一種の聯想と見做す可き者なり。

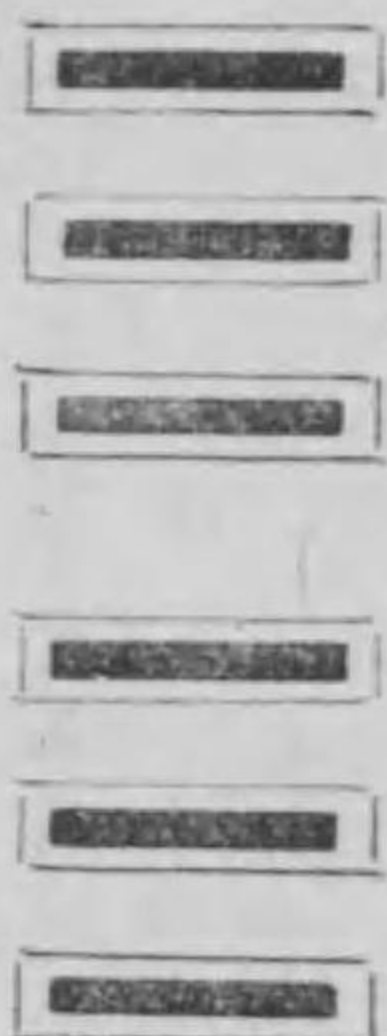
内卦を貞と曰ひ、外卦を悔と曰ふ。左傳に「蠱之貞風其悔山」とある是れなり。又占

筮の場合には本卦を貞と曰ひ、之卦を悔と曰ふ。國語に「貞屯、悔豫、皆八」とある如き是れなり。然れども此名稱は後世に興りし者にして易創作の當時より存在せしにあらず。

第三節 六爻は下より上に向て

昇進しつゝあると

此れ前述せる中に包含せらるれども殊に注意すべき所なれば此に改めて之を記せんとす。周易古來の習慣として爻を積むには必ず下より上にす。故に六爻



中の最下爻を謂て初爻となし、順次に二三四五上と數ふ。初爻に陰ある時は小人又は惡の初まりし者としてこれを惡み、之を戒慎す。此くて坤

の初六に於ては「履霜、堅冰、至」と曰ひ、又更に繫辭傳には詳かに此意を敷演して「積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり、臣にして其君を弑し子にして其父を弑す、一朝一夕の故にあらず、其繇て來る所の者漸あり、之

を辯ずること早く辯せざるに由るなり。易に曰はく霜を履みて堅冰至る。蓋し順を言ふと謂へり。其代り初めに陽ある時は之を喜ぶ。復の象に於ては、復は其れ天地の心を見るかと謂へり。去れば如きは陰の増長せる者として喜ばず。の如きは之を喜ぶを常とす。泰の卦に於ては小往大來といへり。即ち陰去り陽來るの意なり。又否の卦に於ては大往小來といへり。即ち陰來りて陽去るの意なり。

第四節 天地人に則ること

六爻は之を二づ、算ふる時は三なり。三は天地人三才を聯想せしむ。故に六爻が天地人三才を表象すとす。亦自然の勢なり。上二爻を天となし中二爻を人となし下二爻を地となす。繫辭傳に曰はく、

易の書たる廣大悉く備る。天道あり、人道あり、地道あり。三才を兼ねて之を兩にす。故に六六とは他に非ず。三才の道なり。道に變通あり。故に爻と曰ふ。爻に等あり。故に物と曰ふ。物相雜る。故に文と曰ふ。文當らず。故に吉凶生ず。

又說卦に云はく、昔聖人の易を作るや將に以て性命の理に順はんとす。是を以て天の道を立つ。曰はく陰と陽と。地の道を立つ。曰はく柔と剛と。人の道を立つ。曰はく仁と義と。三才を兼ねて之を兩にす。故に易は六畫にして卦を成す。陰を分ち陽を分ち。迭に柔剛を用ふ。故に易は六位にして章を成す。

繫辭說卦何れも六爻は天地人三才に倣ひ。乃至は三才の道を表象するものとなす。三才とか天道地道人道とかの如き思想を懐ける古人が易の六爻を見る時は必ず然か聯想せざるを得ざりしなるべし。即ち古人が起こせる聯想は此の如きものなりき。

第五節 陰位陽位

六爻は下より數へて一より六に至る。一は奇、二は偶、三は奇、四は偶、五は奇、六は偶なり。奇を陽位とし、偶を陰位とす。



陰は陰の位に居り、陽は陽の位に居るを以て正しとなす。然らずして陰を以て陽位に居り、陽を以て陰位に居るは皆不祥なり。但し此の例外あり。陰を以て陽位に居り、陽を以て陰位に居るは兩者の性を折衷すとなすことある。是れ卦の性質如何に由る。一般に立言す可らざるなり。各爻其位を得る時は水火既濟となる。 是れなり。各爻其位に安んず。未濟は安んぜず。故に活動す。六十四卦中其位の正きを得る者は既濟の一卦あるのみ。乃ち易の諸卦は皆活動しつゝある者として見るべきなり。六爻に付ては剛柔と云ふべく。陰陽といふ可らずとの説あり。(周易新疏) 必ずしも従はず。

第六節 各爻の社會的位置

一卦六爻初より上に至る。之を社會的階級に應用すれば初爻は未だ仕へざるの人、二爻は士、三爻は大夫、四爻は三公九卿諸侯、五爻は天子、上爻は無位の地、在野

の賢人又既に老いて祿位を去りたる者等是れなり。 の上九に不事王侯高尚其事とある是れなり。六經圖考には初爻を以て士となせど取らず。其の中に就き、五は天子の位として最も重く、二は下體(即ち下卦)の中位として又重要な者なり。六爻の位に就き、繫辭傳言へるあり。曰はく。

易の書たる。始を原ねて終を要め、以て質と爲すなり。六爻相雜つて唯其の時の物なり。其の初は知り難し。其の上は知り易し。本末なればなり。初の辭は之を擬す。卒に之が終を成す。若し夫れ物を雜へ徳を撰み、是と非とを辨するは則ち其の中爻に非ざれば備らず。噫、亦存亡吉凶を要することは則ち居て知る可し。知者、其の象辭を觀るときは則ち思半に過ぎん。二と四と功を同じうして位を異にす。其の善同じからず。二は譽多く、四は懼多し。近ければなり。柔の道たる。遠かるに利からざる者は其の要咎無く、其の用柔中なればあり。三と五と功を同じうして位を異にす。三は凶多く、五は功多し。貴賤の等なり。其の柔危く、其の剛勝るか。

二と四とは共に陰位なり。故に悔を同ふす。二は陰位に在りて且つ中なり。即ち

柔にして中なり。譽れ多き所以。四は君に近きを以て其地位危し。柔中の人は君に遠かるを以て利とせず。柔中なれば咎无きを得るを以てあり。三、五、共に陽位。故に功を同ふす。而も位を異にす。三は社會にありて漸く人の注目する所なり。然れども尙ほ賤し。故に凶多く。五は天子の位。功皆之に歸す。初と上とは始と末と也。初は未だ仕へざるの位置。故に其の意味知り難く。六は已に効をなし終れる者。故に其終を言ふべきなり。

第七節 一爻一卦の象あること

八卦には各々其象あり。而かも八卦は各其の主とする一爻を有す。震坎艮の巽離兌の是れなり。此の事を念頭に置き、以て六畫卦を見るときは各一畫に八卦の象ありとして之を思考するを得べし。易の爻辭の之にて意味を取りし者甚だ多し。乾卦に震をさし。然れども各爻に龍を言ふ。此れ一陽爻を以て震と見做したるなり。又田は離の象なり。師卦に離なし。而して六五上六共に田有禽と云ふ。是れ上卦坤中の一偶畫を以て離と見たるなり。坎を隱伏とし。又月とす。夬卦に坎をさし。

其九二に暮夜を言ふ。是れ乾中の一奇畫を以て坎月の象とみすなり。坤六三に曰はく或從王事无成有終と。而して訟卦に坤をさくして六三亦曰ふ。或從王事无成と。是れ坎の一偶畫を以て坤の象と見るなり。凡そ此類少からず。

第八節 承、乘、應、比、據、互體、約象

六爻の關係に就き、承、乘、應、比、據の五者を區別するを得。相隣せる數爻に就き、下は陰、上は陽なる時、下なる陰(其數一)が上なる陽(其數一)を承くると見たるとき之を承と謂ふ。承は消極的作用なり。陰が陽の影響を蒙りつゝあるあり。然れども周易の措辭は凡ての場合に皆此の關係を應用せるにあらず。易の活例として見るべきものなり。

坎	六四が九五を承く
明夷	六二が九三を承く
損	六四、六五が上九を承く
姤	初六が九二、九三、九四、九五、上九を受く

乗は乗るなり。超越の意なり。即ち陰爻が陽爻の上に在りて其の序を失ふとして見たるとき之を乗と謂ふ。

坎

上六が九五に乘る。

爻と爻と相親比するとして見たるとき之を稱して比と謂ふ。比は親比。比周なご讀む字なり。一と二、二と三、三と四、四と五、五と六、二爻づゝ相親比す。一方が剛にして一方が柔なれば善く比す。殊に六四の九五に比するを以て吉となす。例へば

外賢を比す。以て上に從ふなり。

と又

觀の象傳に云はく、

國の光を觀るとは尙んで賓とするなり。

と。然れども剛柔ならざるも接近すれば則ち相比すと見るごとあり。故に泰の初九に云はく、

茅を抜いて茹す。其の彙を以てす。征て吉。

と。此れ其の同類を云ふなり。

應は一と四、二と五、三と六とが相應じ一致協同をなしつゝあるものとして見たるを謂ふ。剛と柔とを以て應すとあす。剛と剛、柔と柔となれば應せず。但し多少の例外あり。例へば乾の九二と九五と相應じ、坤の六二と六五と相應するが如し。應の最も重要なる者は二と五となり。一と四とは次ぎ三と六とは最も輕し。位置の高下によるなり。乾鑿度に云はく、


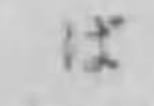
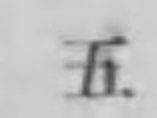

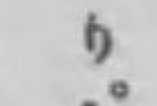
三畫已下を地と爲し、四畫已上を天と爲す。地の下に動くものは天の下に應じ、地の中に動くものは天の中に應じ、地の上に動くものは天の上に應ず。即ち初爻と四爻と對し、二爻と五爻と對し、三爻と上爻と對するを應と云ふ。陽が陰の上に據り居るとして見たる時に據と言ふ。陰を蹈み臺となし居るとして見たるなり。

困、鄭註に云はく、二據陰と。

井、荀爽註に云はく、三不得據陰と。


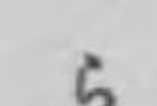

此れ等の關係は畢竟卦と爻との間に存在する者にして、易の卦爻の辭を作りし人の腦中に浮びし者なり。即ち今の周易の卦爻の辭は此れ等の關係を基礎と

して作られたるものなり。此れ等の關係は又以て支那上代に於る人情の一般を窺ふに足る。批評的に觀察すれば此れ等のことは易の作者が然か感せしと云ふ迄の事にして何人が見ても然か感せざるを得ずといふが如きものにはあらず。其以上に深き意味あるにはあざざるなり。








又第二爻第三爻第四爻を併せて三爻となし之を一卦と觀ることを得べし。例へば  に就て  丈を特別に取り別けて見得べき如し。之れと同く三四五を併せて三爻となし、一卦と見ること出得べし。乃ち此卦に於て  を取り別けて得べき如し。漢の京房は前者(二三四)を名けて互體と言ひ、後者を約象と言へり。左傳に觀  否  に之くに遇ふ。曰はく、風爲天於土上山也。あり而して杜預は之を注して自二至四有艮象と曰へり。即ち古代より此意味を取りし者あるを知るべし。

第九節 卦形

一卦の形狀は又大に注意すべき者あり、凡て物は見様に由りては奇妙に感せ

らるゝとあり、枯れたる木根を取り來りて虎の蹲く狀ありとも見るべく、蔓の枯れたるを持ち來りて蛇の蜿蜒として冑へる態なりとも見得べし。易の作者も亦卦形を種々の物象に見立て、種々の名を附せり。此くて  は頤と見立てられ  は鼎と見立てられたり。又  は竹の節と見立てられたり。一寸考ふる時は甚だ愚なるとの様なれども、免に角此種の意味を取りしは事實なり。蓋し易の作者は種々に卦形を觀察し、種々なる聯想を起しつゝありしものなり。

第十節 卦爻は變ずる意味を含む

易は變化を示めず者あり、宇宙は絶へざる變化の有様なり、其變化に一定の法則あり、之を陰陽にて示めさんとするは實に易の精神なり。去れば易は變化を以て生命となす者也。易の一書を見るに何れの點に於ても變化を尙ばざることなし。  乾の六爻は何れも老陽なれば變じて陰とからんとす。其の第一爻變すれば  垢第二爻變すれば  同人第三爻變すれば  履第四爻變すれば  小畜第五爻變すれば  大有第六爻變すれば  夬

とある。若し又二爻變三爻變四爻變にしても五爻變にしても他の種々の卦となるべし。乾の卦六爻其者に變化の意味ありとして見るは、是れ實に易哲學の注意すべき點なり。此に於てか一卦變じて六十四卦となるの説あり。今朱子の易學啓蒙中より其一二例を引用する事左の如し。

乾の六爻のみならず、他の卦の陽爻も亦皆老陽と見るなり。此れ易が變化を尙ぶより來りし所に於て繫辭傳には乾の策二百一十有六、坤の策百四十有六あり。即ち老陽老陰の數三十六、及び二十四(占筮の章を見るべし)に六爻を乘せしものなり。

乾

姤

遯

同人

訟

无妄

中孚

履

巽

家人

睽

小畜

鼎

離

兌

大有

大過

革

夬

否

大畜

漸

渙

益

損

睽

艮

觀

需

旅

未濟

蠱

噬嗑

賁

節

萃

蹇

大壯

咸

困

井

隨

既濟

歸妹

小過

恒

泰

豐

泰

泰

泰

泰

泰

泰

願	屯	震	明夷	臨	復	坤	師	歸妹	節	比	豫	謙	泰	損	剝

易の經文に在りては陽を九と曰ひ陰を六と曰ふ。即ち初九、九二、九三、九四、九五、上九の如く、又初六、六二、六三、六四、六五、上六の如し。九や六は占筮にて出る數にして變する者、易は變を尙ぶが故に九、六を以て陰陽の代名詞とす。去れば何れの爻も皆變するものとして觀察すべし。例へば乾一卦に就て之を見るに初九變すれば姤 となる。其下卦を巽となす。巽を入となし、隱となす。故に潜龍と曰ふ。各爻は變動するものと見て其辭を下せしども解釋し得べし。河田孝成の周易新疏は其標本的なるものなり。三百八十四爻に就き此解釋法を應用せり。繫辭に「爻は天下の動に效ふ者なり」とあり。即ち三百八十四爻其者に變動の意味ありとなし、且つ周公の繫けし爻辭其者も亦此意味に於て作られし者となすなり。

第十一節 爻と卦との關係

爻には位の當否あり。卦には象あり。徳あり。社會的位置あり。承、乘、應、比、據の關係あり。而して卦は時を示めし。爻は位を示めす。時と稱するは一般に狀態 (Status) を意味す。時勢の意味のみにはあらざるなり。今周易折中の言を假りて之を言はんか、左の如し。

消息盈虛、之を時と謂ふ。否泰剝復の類是れなり。又事を指して言ふ者あり。訟、師、噬嗑、頤の類是れなり。又理を以て言ふ者あり。履、謙、咸、恒の類是れなり。又象を以て言ふ者あり。井、鼎の類是れなり。四者皆之を時と謂ふ。

王弼曰はく。

夫れ卦は時なり。爻は時の變に適ふ者なり。夫れ時に否泰あり。故に用に行藏あり。卦に小大あり。故に辭に險易あり。一時の制、反して用ふべし。一時の吉、反して凶あるべし。故に卦は反を以て對して爻亦皆變あり。

爻には吉凶あり。之れに應じて以て處世の法を立つべきことを言へるなり。此

の時に當りて此の位に居る如何に行動すべきか、是れ六十四卦三百八十四爻の教ふる所なり。

第十二節 三百八十四爻の一般性質

三百八十四爻は、六十四卦と關係するにあらざれば其の意味を窺ふこと能はず。此の時に當て、此の位に居る如何に行動すべきか、是れ三百八十四爻の意味ある所あり。而して易の經文は易の作者の見たる此意味を發揮せる文章なり。故に三百八十四爻の意味は時と位とより打算せらるゝものたらざるべからず。而かも時その者に對する判斷は、周易の作者と後世人と必ずしも一致すること能はず。又同く後世人の間に於ても種々の議論あるべきなり。(八卦の性質參考)然るに周易の作者は兎に角作者自身の見たる所を以て是等に對して一種の意味を附せり。故に易を解するに當り、易經を許さざるを得ざる以上は周易の見たる所を以て根本となさざるべからず。例へば天地否の八卦に就いても各人一様に妥當なりとは思はざるべく、或は却つて之を以て天地其の處を得たりとなすものもあるべし。

し。或は、遯又は姤の名を與ふる者あるやも知るべからず。然るに之を以て天地否となすは易の作者の獨斷と見ざるべからず。假令獨斷なるにせよ、易の作者が之を否と定めたる以上は易經を通じて見たる易の思想系統に在りては天を上とし地を下とするは否の意味あるものとなさざるべからず。

然るに他の一面より見れば六爻各々其の位置あり、之に従つて其の性質を異にす。初は凡て其の時(卦)の始めを意味し、又は未だ深くその時勢に關はらざることを意味す。一般に物、又は人の微なるを意味する者なり。二は既に天下の事に與かり居るものにして下卦の中なるが故に其の性質に於て正しきものとなす。三は下卦の上にして其の位高きが故に高ぶるの嫌ひありとす。陽之れに居る時は過剛となし、陰此れに居る時は万事度に過ぐるものとなす。故に多くは之を戒む。又事柄に於ては凡て中頃の意從て變せんとする意ありす。例へば泰(地)は太平の意味ある卦なれども、太平は永續する者にあらざることを示めさんとして下より第三爻に於て、九三平の跛ならざるなく、往の復せざるなし、艱貞にして咎なし。其孚を恤ふること勿れ、食に干て福ありと謂へり。

四は陰位にして君に近き處、而も上卦の下にあり、故に陽此れに居る時は過剛の弊あることなしとし、又陰是れに居る時は柔に過ぐるものとなす。此くして乾の九四に於ては或躍在淵、无咎といひ、又坤の六四に於ては乃ち括囊、无咎、无譽と謂へり、五は即ち君主の位にして二と相ひ對して重要な位置なり、其の吉凶は種々の條件によりて定まる。陽此れに居りて善なることもあり、陰此れに居りて善なることもあり、惡も亦此れに準ず。六は時の終り又は極の意味あり、又賢人が時流の外に超然たる意味もあり、剝の上九に碩果不食、君子得輿、小人剝廬とある如き是れなり。六爻の位置より見たる性質は、大概斯の如し。易の例を取ることに一ならざるが故に、例外とすべきものも此れなきにあらず。然れども要するに以上を以て標準となすべし。

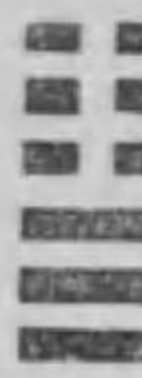
六爻の此の性質は尤も抽象的なるが、此の抽象的性質を卦の時に當て、依りて、而して、後彼の三百八十四爻の具體的性質を生ずるものなり。易經の文字は皆此の綜合より出でたるものとなすべきあり。三百八十四爻の辞は卦の時と六爻の抽象的性質との又交點なり。此の時に當りて、此の位に居る如何に行動すべきか。

是れ即ち易の教ふる處なり、故に六十四卦三百八十四爻の辞は六十四條、三百八十四條の訓誡と見るべし。此れ等の訓誡は古代聖人の社會的經驗より得來れるものなり。

第三章 易の經典

第一節 易經の體裁及び作者

六十四卦三百八十四爻の意味を文字に書き著はしたるものが即ち易經あり、其の外に孔子の作と稱せらるゝ十翼あり、此れ等をも併せて普通に易經といふ。去れば易經は上下經と十翼とより成る。上下經は象と象との二種より成る。象とは卦全體の意味を判斷したる語にして、象とは各卦に就て其各一爻の意味を判斷したる語なり。左の一卦に就て之を見よ。



泰小往大來吉亨

(象) 卦辭

初九拔茅茹以其彙征吉

(象) 爻辭

九二包荒用馮河不遐遺朋亡得尚于中行

(象) 同上

九三、无平不陂、无往不复、艱貞无咎、勿恤其孚、于食有福。

(象) 同上

六四、翩翩不富、以其隣不戒以孚。

(象) 同上

六五、帝乙歸妹、以祉元吉。

(象) 同上

上六、城復于隍、勿用師、自邑告命、貞吝。

(象) 同上

而して象は文王の作象は周公の作と稱す。十翼は左の如し。

上象 上經の象を解釋せる者

下象 下經の象を解釋せる者

上象 上經の象を解釋せる者

下象 下經の象を解釋せる者

上繫辭 一般に易の理を説明せる者

下繫辭 同上

文言 乾坤二卦の字句に就て其義を闡明せる者

說卦 一般に八卦の理を説明せる者

序卦 六十四卦の順序を述べたる者

(但し象は獨り經の象のみならず、各卦全體の意味をも解釋せり。)

雜卦 六十四卦の二卦づゝ對待するを述べたる者

而して十翼は孔子の作と稱せらる。(孔子世家)而して伏羲氏は卦を畫すと稱せらるゝと前述の如し。故に伏羲、文王、周公、孔子を指して易の四聖人となす。易經の作者に就て彼れ此れ議論するは恰も沙上に樓閣を築かんとするが如し。何んとなれば確實ある材料とては一も之れなく皆想像に外ならざればなり。但だ司馬遷以來此く傳ふるに外ならざるのみ。殊に伏羲氏は一人の名にはあらで部族の名なるべく。(別項参考)十翼も亦一人の作にあらざるべし。(第九章参考)象象を作りし者は果して文王周公なるか否かは不明なれども其孔子以前なることは疑ふ可らず。河田孝成の説參看の價値あり。(周易新疏別錄上)上經下經に別れしは何時の頃なるか明かならず。十翼に序卦あり、又繫辭に二篇の策萬有一千五百二十とある以上は其先秦時代よりなるを知るべし。呂東萊は文王周易を定めし時よりとなす。

第二節 六十四卦の順序

六十四卦は上經下經に分る。上經は乾坤を首にし坎離を尾にす。其順序は如何なる意味あるか。

第一序卦傳に云はく

天地あつて然る後萬物生ず。天地の間に盈る者は唯萬物。故に之を受るに屯を以てす。屯とは盈るなり。屯とは物の始て生ずる也。物生すれば必ず蒙る。故に之を受くるに蒙を以てす。蒙とは蒙なり。物の穉きなり。物の穉き養はざるべからざるなり。故に之を受くるに需を以てす。需とは飲食の道あり。飲食は必ず訟あり。故に之を受くるに訟を以てす。訟は必ず衆起るあり。故に之を受くるに師を以てす。師とは衆なり。衆は必ず比する所あり。故に之を受くるに比を以てす。比とは比なり。比すれば必ず畜る所あり。故に之を受くるに小畜を以てす。物畜へて然る後禮あり。故に之を受くるに履を以てす。履て而して泰なり。然る後安し。故に之を受くるに泰を以てす。泰とは通なり。物以て終に通すべからず。故に之を受くるに否を以てす。物以て終に否すべからず。故に之を受くるに同人を以てす。人と同きものは物必ず歸す。故に之を受くるに

大有を以てす。有大なるものは以て盈つ可からず。故に之を受くるに謙を以てす。有大にして而して能く謙す。必ず豫す。故に之れを受くるに豫を以てす。豫すれば必ず隨うとあり。故に之を受くるに隨を以てす。喜を以て人に隨うものは必ず事あり。故に之を受くるに蠱を以てす。蠱とは事なり。事ありて後大なる可し。故に之を受くるに臨を以てす。臨とは大なり。物大にして然る後觀る可し。故に之を受くるに觀を以てす。觀るべくして後合ふ所あり。故に之を受くるに噬嗑を以てす。嗑とは合なり。物以て苟も合ふ可からざるのみ。故に之を受くるに賁を以てす。賁とは飾あり。飾を致して然る後に享る時は則ち盡く。故に之を受くるに剝を以てす。剝とは剝なり。物以て終に盡く可らず。剝上に窮れば下に反る。故に之を受くるに復を以てす。復する時は則ち妄おらず。故に之を受くるに无妄を以てす。无妄ありて然る後畜ふべし。故に之を受くるに大畜を以てす。物畜ひて然る後養ふ可し。故に之を受くるに頤を以てす。頤とは養あり。養はざる時は則ち動く可からず。故に之を受くるに大過を以てす。物以て終に過ぐべからず。故に之を受るに坎を以てす。坎とは陷な

り。陷れば必ず麗く所あり。故に之を受るに離を以てす。離とは麗なり。

天地ありて然る後萬物あり。萬物ありて然る後男女あり。男女ありて然る後夫婦あり。夫婦ありて然る後父子あり。父子ありて然る後君臣あり。君臣ありて然る後上下あり。上下ありて然る後禮義錯く所あり。夫婦の道は以て久しからざるべからざるなり。故に之を受くるに恒を以てす。恒とは久きなり。物以て久しく其所に居るべからず。故に之れを受くるに遯を以てす。遯とは退なり。物以て終に遯るべからず。故に之を受くるに大壯を以てす。物以て壯に終ふべからず。故に之を受くるに晉を以てす。晉とは進なり。進めば必ず傷ふ所あり。故に之を受くるに明夷を以てす。夷とは傷なり。外に傷る者は必ず其の家に反る。故に之を受くるに家人を以てす。家道窮れば必ず乖く。故に之を受くるに睽を以てす。睽とは乖なり。乖けば必ず難あり。故に之を受くるに蹇を以てす。蹇とは難なり。物以て難に終ふ可からず。故に之を受くるに解を以てす。解とは緩なり。緩めば必ず失ふ所あり。故に之を受くるに損を以てす。損して已まざれば必ず益す。故に之を受くるに益を以てす。益して已まざれ

ば必ず決す。故に之を受くるに夬を以てす。夬とは決なり。決しては必ず遇ふ所あり。故に之を受くるに姤を以てす。姤とは遇なり。物相遇ふて後聚る。故に之を受くるに萃を以てす。萃とは聚なり。聚りて上る者を升と謂ふ。故に之を受くるに升を以てす。升つて已まざれば必ず困しむ。故に之を受くるに困を以てす。上に困しむ者は必ず下に反る。故に之を受くるに井を以てす。井道は革めざる可らず。故に之を受くるに革を以てす。物を革る者は鼎に若くは莫し。故に之を受くるに鼎を以てす。器を主る者は長子に若くは莫し。故に之を受くるに震を以てす。震とは動なり。物以て動に終ふ可からず。之を止む。故に之を受くるに艮を以てす。艮とは止なり。物以て止に終ふ可からず。故に之を受くるに漸を以てす。漸とは進なり。進は必ず歸する所あり。故に之を受くるに歸妹を以てす。其の歸する所を得る者は必ず大あり。故に之を受くるに豊を以てす。豊とは大なり。大を窮る者は必ず其の居を失ふ。故に之を受くるに旅を以てす。旅して容る所無し。故に之を受くるに巽を以てす。巽とは入なり。入つて後之を説ふ。故に之を受くるに兌を以てす。兌とは説なり。説で後之を

散す。故に之を受くるに渙を以てす。渙とは離なり。物以て離に終ふ可からず。故に之を受くるに節を以てす。節して之を信す。故に之を受くるに中孚を以てす。其信ある者は必ず之を行ふ。故に之を受くるに小過を以てす。物に過ることある者は必ず濟ふ。故に之を受くるに既濟を以てす。物窮むべからざるなり。故に之を受くるに未濟を以て終ふ。

乾坤を首にしたるは天地若くは父母を先きにしたる者と見るべきなり。既濟未濟を後にしたるは易は變を尙ぶが故なり。即ち未濟は未だ濟まずと云ひて更に何等か變化の起ることを豫想す。此二條の意味は今日より見ても面白き處あり。程伊川曰はく

乾坤は天地の道、陰陽の本なり。故に上篇の首めとあす。坎離は陰陽の成質なり。故に上篇の終りと爲す。咸恒は夫婦の道、生育の本なり。故に下篇の首と爲す。未濟は坎離の合するあり。既濟は坎離の交なり。合して交る時は則ち物を生ず。陰陽の成功あり。故に下篇の終と爲す。傳程

正義に曰はく。

乾坤は陰陽の本始、萬物の祖宗なり。故に上篇の始と爲すなり。離を日と爲し、坎を月と爲すは日月の道、陰陽の經、萬物を始終する所以なり。故に坎離を以て上篇の終と爲すなり。咸恒は男女の始、夫婦の道なり。人倫の興る必ず夫婦に繇る。祖宗を奉承し、天地の主と爲る所以なり。故に下篇の始と爲すなり。既濟未濟を最終と爲す者は戒慎を明にして王道を全ふする所以なり。乃ち文王の定むる所なり。

李舜臣曰はく。

頤大過の後に於て坎離を以てす。蓋し剛柔の中を以て大過の弊を救ふあり。中孚小過の後に於て既濟未濟を以てす。亦剛柔の交にして中ある者を以て小過の弊を救ふなり。

序卦は尤も牽強の嫌ひあり。勿論六十四卦の順序は前の諸家の言に由りて見得べきか如く多少の意味あるとは疑ふ可らず。換言すれば當時に於て既に多少の意味を以て此く排列せられたることは殆んど疑ふ可らず。殊に所謂卦綜に於て然りとあす。後節然れども今日より見れば随分牽強附會の處少からず。故に六

十四卦の順序には必ず一定不變の大真理あるものとのみ思ふべからず。此くするは却て無益の業なるべし。序卦を其儘に信せんか、是れ亦可なり、信せざらんか、強いて其順序を附會す可らざるなり。而して著者は序卦を以て牽強附會の甚き者となし、孔子の作となさざるなり。

第三節 卦綜と卦錯

卦綜は明の來知徳の與へたる名稱にして六十四卦の順序に就て其の相隣りせる二卦の相互に反對し居るをいふ。毛奇齡(其兄の説と稱す)は之を名けて反易となせり。(仲氏)例へば 隨の綜卦は 蠱にして 否の綜卦は 泰なる如し、象は多く之に就て義を取る隨の象に曰はく

隨は剛來りて柔に下る、
蠱は剛上りて柔下る、

と。即ち隨と蠱とは相綜せるものとして此く言ひたるなり。六十四卦中此例少か

らず、

次に明の來知徳は卦を表と裏とより見て之を卦錯と名けたり。例へば

乾の卦錯は 坤、坎の卦錯は 離なる如し。此れ各人自身に

熟視すれば則ち明かなるべし。

六十四卦中 乾 坤 坎 離 大過

頤 小過 中孚の八卦は綜するとなし。此れ亦顛倒するとなきをい

ふ。一見して則ち明かなるべきあり。綜錯等の文字は六ヶ敷けれども其意は即ち

簡單なりとす。

又 否 泰 既濟 未濟 歸妹 漸

隨 蠱等の卦は錯もすべく、又綜もすべし。故に綜卦は五十六あ

り。二づゝ相ひ顛倒せるなるが故に其實は二十八卦。來氏は卦綜卦錯の名を用ふ

れども後世の儒者必ずしも皆之れに由るにあらず。綜といふを錯といふことも

あり。又は單に卦變といふこともあり。(伊藤善詔曰はく、)

予は即ち嘗て妄意す。六十四卦の序、乾より未濟に至るまで皆二卦反對相並ん

で以て叙つ。象に卦變を言ふ。皆兩卦反對の中自ら相往來するのみ。隨は蠱より來り、蠱は隨より來る。泰は否より來り、否は泰より來る。剛柔二爻或は内より外に往き、或は外より内に來る。卦毎に此に由つて義を取る。後、明の來知徳の易解を閱す。適予が説と符す。之を卦綜と謂ふ。錯綜の義を取るなり。嗣いで曹學佺の可説、鄒德溥の易會を得、亦皆來註を取る。人の見る所或は偶相會す。固に古今彼此を分たざるあり。(周易經翼 通解凡例)

來知徳が綜錯の名稱を思ひ付きしは即ち雜卦に由る。今雜卦の全文を引用すること左の如し。

乾は剛、坤は柔、比は樂み、師は憂ふ、臨觀の義或は與へ或は求む、屯は見れて其の居を失はず、蒙は雜つて著る、震は起、艮は止、損益は盛衰の始、大畜は時、无妄は災、萃は聚つて升は來らず、謙は輕くして豫は怠る、噬嗑は食、賁は無色、兌は見れて巽は伏す、隨は無故、蠱は則ち飾る、剝は爛、復は反、晉は晝、明夷は誅、井は通じて困は相遇ふ、咸は速、恒は久、涣は離、節は止、解は緩、蹇は難、睽は外、家人は内、否泰は其類に反る、大壯は則ち止り、遯は則ち退く、大有は衆、同人は親、革は故を去る、鼎は

新を取る、小過は過る、中孚は信、豊は多故、親寡は旅、離は上つて坎は下る、小畜は寡、履は處らざるなり、需は進まざるなり、訟は親しまざるなり、大過は顛、姤は遇、柔剛に遇ふなり、漸は女歸つて男を待つて行くなり、頤は正を養ふなり、既濟は定るなり、歸妹は女の終りなり、未濟は男の窮るなり、夬は決、剛柔を決するなり、君子の道長じて小人の道憂ふるなり。(雜卦の文は解し難き所あれども必ずしも一々拘泥せず。但だ二卦の對立を知れば足れり。)

然れども雜卦に在りては大過以下相對せず、或は此順序を改めて前例の如くせんとするものもあれども(例へば蔡節齋の如し)如何にや本義に従て疑を存す。兎に角雜卦傳に由りて思ひつき得べきが如く六十四卦は二卦づゝ相ひ顛倒し居る様に排列せられたるなり。

然らば某なる一對と他の一對と如何なる關係あるや、吾人を以て之を見るに二對づゝ顛倒する様に列せしは純然機械的の進動にして深き意味あるにはあらず。従て一對と一對との連絡も必ずしも意味ある者と謂ふべからざるなり。唯だ六十四卦の排列に付ては諸家の謂ひしが如く、乾坤を首にして既濟未濟を尾にすると、坎離を上篇の終りとし、咸恆を下篇の始めとなすと、又二卦づゝの顛倒

し居ると等は意識的に然かせられしものと謂ふべきのみ、今上下二篇の卦爻に關する統計表を示めさんに左の如し。

乾	兌	離	震	巽	坎	艮	坤
上篇	一二	四	六	七	四	八	七
下篇	四	一二	一〇	九	一二	八	九
					四		陽爻二六
							陰爻九八
							陽爻八六
							陰爻九四

即ち上篇には乾坤多く、兌巽少し、下篇は之に反し、兌巽多く、乾坤少し、即ち乾坤二卦を包含するものは上篇に多しとなす。

第四節 三易の文

一、意味 古代三易の名あり、『周禮』筮人三易を掌る。以つて九筮の名を辯ず、一に曰はく連山、二に曰はく歸藏、三に曰はく周易、九筮の名一に曰はく筮更、二に曰はく筮咸、三に曰はく筮式、四に曰はく筮目、五に曰はく筮易、六に曰はく筮比、七に曰はく筮祠、八に曰はく筮參、九に曰はく筮環、以て吉凶を辯ずと、三易の何なるやは後世之を知るを得ず、杜子春日はく連山は伏犧、歸藏は黃帝と、鄭玄の『易贊』及び

『易』に曰はく、夏に連山と曰ひ、殷に歸藏と曰ひ、周に周易と曰ふと、鄭玄又釋して云ふ、連山は山の雲を出すと連々として絶えざるに象る。歸藏は萬物其中に歸藏せざるなし。周易は易道、周普にして備はらざる所なきを言ふと、而して普通の傳説に據れば連山は艮を首にするが故に名あり、歸藏は坤を首にするが故に名あり、而して連山は夏の易、歸藏は殷の易なり、三易の説終に定め難し、『周易折中』に曰はく、鄭康成(鄭玄)を指す此釋ありと雖も、更に據る所の文なし、先儒此れに因りて遂に文質の義となす、皆繁にして用なし、今取らざる所、『世譜』等の群書を按ずるに神農一に連山氏と曰ひ、又列山氏と曰ふ、黃帝一に歸藏氏と曰ふ、既に連山歸藏並びに代號なれば則ち周易に周を稱するは岐陽の地名を取れるあり、『毛詩』に周原靡々と云ふ者は是れなり、又文王易を作るの時正さに姜里に在り、周徳未だ興らず、猶是れ殷の世なり、故に周と題して殷に別つ、文王の演ずる所なるを以ての故に之を周易と謂ふ、猶周書周禮の如し、周と題して以て餘代に別つなりと、若し前説の如く、六十四卦艮を首にするが坤を首にするかに從て連山歸藏等の名ある者とすれば則ち周易は乾を首にするが故に又特別の名あるべき筈也、『折中』の

192
193
314
180
204
192
64
68
128
61
68
129

説是に近きが如し。

二、内容 連山歸藏が共に六十四卦なるは周禮に於て明か也。其餘は知るべからず。朱元昇『三易備考』に連山を説いて云ふ。連山に二篇あり。復より乾に至る迄を陽儀とし。姤より坤に至る迄を陰儀とす。其策万有一千五百二十と。又云はく長分消翁は連山易の至精至變至神の理寓す。乾と坤と對す。乾の長は即ち坤の消。乾の分は即ち坤の翁。坤の長は即ち乾の消。坤の分は即ち乾の翁。兌と艮と對し。離と坎と對し。震と巽と對す。餘五十六卦。兩々相對す。長分消翁。悉く八卦に準ず。歸藏を説いて云ふ。歸藏易は六甲を以て六十四卦に配す。藏する所は五行の氣用ふる所は五行の象なり。云云。玉函山房輯述書連山の遺爻。姤の初六。龍化于蛭。或潛于窪。茲藜之牙が如き。中孚の初八。一人知女。尚可以去。が如き。歸藏の遺爻。瞿有瞿。有魴。宵梁爲酒。尊于兩壺。兩輪飲之。三日。然後蘇。土有澤。我取其魚。鼎有黃耳。利取鉏鯉。有鳧。鷺。鷺有雁。鷓。爽。君子戒車。小人戒徒。が如き。皆古雅誦すべきなり。同上。その眞偽知る可からざれども。今暫く記して以て參考に供す。顧炎武の『日知錄』に云はく。左傳僖十五年韓に戰ふ。卜徒父之を筮して曰はく吉なり。其卦蠱に合ふ。曰はく千乘三去す。三去の

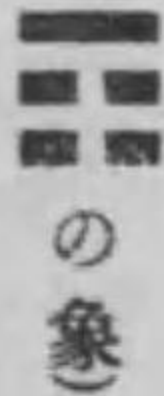
餘其雄狐を獲と。成十六年。鄆陵に戰ふ。曰はく南國覺す。其の元王を射て厥目に中ると。此れ皆周易を用ひず。而して別に引據の辭あり。即ち所謂三易の法かりと。又一説となす。此れ等の逸文は蓋し連山歸藏の舊ならんか。

第五節 上下經の用字法

上下經に用ひられたる文字は多くは各卦の上下二卦又は互體卦體卦德約象等より聯想せらるゝ所の者なり。今一例を舉げて以て之を示めさん。



屯。元亨。利貞。勿用有攸往。利建侯。

來知德曰はく。險難前に在り。即ち上卦の坎中爻は艮止(三四五)にて、の象

往く攸あるに用ふる勿きの象。震は一君二民(一陽二陰)の意侯を建るの象。

初九。盤桓。利居貞。利建侯。

來知德曰はく。中爻艮は石の象なり。桓は大柱あり。震は陽にして木。桓の象なり。中略震を大塗となす。柱石。大塗の上に在り。震木を動かさんと欲し。而して艮止まつて動かさず。柱石動かんと欲して動かざるの象あり。

六二。屯如。遭如。乘馬班如。匪寇婚媾。女子貞。不字。十年乃字。

來知德曰はく。震は馬に於ては作足となす。班如の象なり。應爻を坎とあす。坎を盜となす。寇の象なり。中略。變兌を少女とあす。下より二爻。即是は兌と見るべし。女子の象なり。中略。中爻。艮止。不の字の象なり。中爻。坤土。二三。四土の數は十に成る。十の象なり。

六三。即鹿。无虞。惟入于林中。君子幾。不如舍。往吝。

來知德曰はく。鹿當さに麓に作るべし。舊註亦麓に作る者あり。蓋し此卦の中爻。艮を山となす。山足を麓と曰ふ。三は即ち六三中爻。艮の足に居る。麓の象あり。虞とは虞人あり。三四を人の位となす。虞人の象なり。虞なきとは正應なきの象なり。震は巽に錯す。巽を入となす。入の象あり。上の艮三四五を木となし。下の震を竹となす。林中の象なり。中略。坎は離に錯す。明なり。幾を見るの象なり。舍とは舍て。逐はざるなり。亦艮止の象なり。

六四。乘馬班如。求婚媾。往。吉。无不利。

來知德曰はく。坎を馬となす。又馬の象あり。中略。本爻變すれば中爻。四五六。巽と

なる。即ち長女なり。震を長男となす。婚媾の象なり。眞の婚媾にあらざるなり。賢を求めて以て難を濟ふ。此象あるなり。舊說。陰陽を求むるの理なしと。象を知らざる者と謂ふべし。

九五。屯其膏。小貞。吉。大貞。凶。

來知德曰はく。膏とは膏澤なり。坎の體。膏澤。雷潤の象あるを以て故に膏と曰ふ。本卦の名は屯。故に膏を屯すといふ。

上六。乘馬班如。泣血漣如。

來知德曰はく。六爻皆馬を言ふは震坎皆馬たればなり。皆班如と言ふは屯難の時に當ればなり。坎を加憂となし。血卦となし。水となす。泣血漣如の象なり。才柔以て屯を濟ふに足らず。初を去ると最も遠し。又應與なし。故に此象あり。

此解釋に據れば屯の一卦六爻の文字の多くは皆上下二卦又は互體錯卦等に關係ある者なり。果して然りとすれば周易上下經の文字使用法は誠に窮屈なる者。謂ふべし。尤も來知德は此流義の解釋に於て有名なる者也。他の學者も多少此流の解釋をなせども此の如く甚しからざるなり。日本の河田孝成は周易新疏

を著はし、三百八十四爻は老陽か又は老陰なるが故に必ず變すべき者となし、變じたる者として意味を取り、因りて以て易の文字を説明せり。例へば乾卦の初九變じて柔となる時は下卦は巽となる。巽に入の象ある故に潜龍となす。又九二變する時は離となる。離に明の象ある故に見龍となすと。其他此に準ず。岡白駒周易解(寫本)を著はし、又此方法にて解釋せし者あり。

心理的に之を論ずれば八卦は各々種々の現象を聯想するが故に六爻卦を見る時は或は上卦に或は下卦に、或は互體に、或は卦體に、或は錯卦或は綜卦に或は卦徳卦情に聯想したる文字を用ひんとするは當然のことに屬す。只易の作者が如何なる點迄此方法にて文字を下せしやは全く知ると能はず。來知徳の如きは餘り穿鑿に過ぐるが如し。卦體とは卦の形體あり。朱子が大壯(雷)の六五に於て卦體は兌に似たり。羊の象ありと云へるが如し。即ち二爻づつ併せて一爻とする時は坤牛、乾首、坤腹の類に拘はらざる者あり。卦情よりして象を立つるなり。乾は本と馬なれ共龍を言ふは乾道變化、龍は乃ち變化の物なるを以て故に龍を以て之を

ふが如し云云。(易義) 乾卦の龍に付ては異説あり。或は曰はく初九は震の一陽に當る故に龍となす。(根本羽) 余は金士麒の説を以て穩かなりとす。來氏曰はく、且つ此爻(初九)巽に變じ、震に錯すれば亦龍の象ありと。餘まり迂回するが如し。

第六節 易經は字書なりといふ説

八卦は其始め書ありて文字なし。乾坤等の文字は後世に至りて附したる者なり。清の孫星衍曰はく。

十言の教は易緯より出づ。伏羲の八卦は象ありて字なし。たゞ既に消息あれば已に重ねて六十四卦となせしを知るべし。(周易正解) 序説參看) 文字と卦畫と何れが先きに生せしや到底知り得ざる所なり。古傳説に據れば伏羲氏始めて八卦を作り、以て作字の源を開きたりといひ、或は黃帝の時、右史蒼頡始めて文字を作れりともいひ、或は蒼頡と左史沮誦との合作なりともいふ。(書の書) 乾坤鑿度に八卦の形は文字なりとの説あり。乃ち

古文天字

古文地字、

古風字、

古山字、

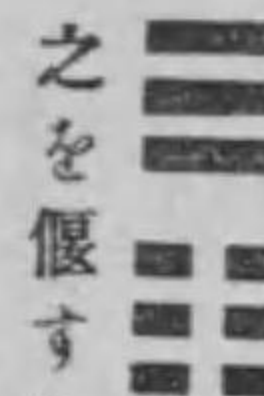
古坎字、


古火字、

古雷字、

古澤字、

各卦に就いて説明せる處あれども今皆之れを略せり。兎に角古代は此の種の文字を用ひしが、後之を以て易の卦となせしといふなり。乾卦の下に於て古天文の字、今乾卦となすとあり。(餘之れに準ず)宋の楊誠齋曰はく、

之を僣すれば  は古の天地の字なり。易に由りて之を知る。坎離に由りて之を知る。となり。之を立つれば水火となる。雷風山澤の字の如

きも亦然り。故に漢書に坤の字は彔に作る。八字立て、而して聲書勝て窮む可らず。豈特に鳥跡のみならんや。後世草書の天字は玄に作る。即ち  なり 誠齋易傳卷一

八卦の畫形を以て文字なりとし、之を集めて以て一切の字をなすとす。易を以て字書となす西人の見解の萌芽とも謂ふべきなり。ホンド、ラクーベラー氏は易を以て字書の類として曰はく、

易經の本文の批評的考究と其の或る部分を原始の形に變ずることによりて余は下の如く結論せざるを得ず。即ち支那に於ける古代の斷片より成り而して聖典中有名にして最も難しき書(易經)の基礎は甚だ辭書に類す。然るに其の本來の意義は失はれ、後には書文等の説明に於ける變化により全く他の目的に用ひられき。かゝる變化と文字の變換とは明白のとなり。易經本來の表は所謂カルデアのシラベルに類し、或は或處の如きは殆んど同一にして易經の作者は此等のシラベルを自らか或は傳説かによりて知り居たることを信せざるを得ず。而して此等シラベルの或る者が支那を開明に導けるパツク族の首長によりて實際支那に持ち來たされしやも計られず。(Lacouperie, Western Origin of the early Chinese Civilization, P. 16.)
而して其の一例に曰はく、

 離



離。【利貞】【亨】【畜牝牛】【吉】【初九】履錯然敬之。【无咎】【六二】黃離

【元吉】【九三】日昃之離不鼓岳而歌【則】大耋之嗟【凶】【九四】突如其來如焚如

死如藥如【六五】出涕沱若戚嗟若【吉】【上九】王用出征有嘉折首獲匪其醜

【无】【咎】

即ち近代は種々の文字を作りしが古代には此れ等の文字なく「離」の一字にて種々の義を有せり。一々之を註せる者が易の經文なり。即ち易經一書は古書を讀むに必要なる字書なりと云ふなり。而して上文〔中〕に包含せしめし利貞亨吉初九无咎元吉六二九三則凶九四六五上九等の文字は易本來の用を離れ占筮の書となせし以後に附加せし者となすなり。其の論據は易の卦形は「バビロン」の楔文字に類し此の文字より思ひ付きしとなすに在り。實際に於て此說多少の興味ありとす。即ち


一「易」の文章は「謎」の如し。連絡を發見すると極めて難し。試みに左の一句を讀め、

初九明夷于飛垂其翼君子于行三日不食有攸往主人有言。

此れ一の謎なり。故に寧ろ「言字」を集録したるに過ぎざる者と見る。又一法なり。

(二)奇妙に重複なき様種々の字句を集めたり。乾以下を讀めば則ち其の然るを知らむ。此の点に於ても亦字書の如く觀せらる。

然れども他の方面より考ふるに(一)若し周易が字書なりしとすれば其の字書は僅か六十四字を含む者となさざる可からず。六十四字のみにては決して文を作ること能はず。(二)若し字書なりとせば「易」の名稱は何の意味もなきことなるべし。

(三)殊に綴字法ならざる國にては卦形にては文字として不十分なり。若し易の八卦を積むこと「アルハベット」を積むが如くなれば可なり。然らずして之を二重にするのみなれば僅か六十四卦を得るに過ぎざればなり。(四)一字が此くの如く多義なれば決して文章を理解せしむる能はず。(五)周易の文章が此の如く連絡なきが如く見ゆるは卦徳は種々の聯想を伴ひ此れ等の聯想を列舉し來るがためなり。(六)奇妙に重複なきも之れがためなり。(七)「バビロニア」の文字は楔形にして支那の「」は二種のみ也。故に「バビロニア」の楔形文字より思ひ付きしにせよ。

は全く異なりたる意味 即ち二原
理の意味 を持ち來りし者と考ふるを得。況んや「パピ
ロニア」にも陰陽二原理に相當する Anu Anat あるにあらずや。即ち二原理として
之を「パピロニア」より借りたりとも解し得べし。且つ「パピロニア」にも亦八卦に類
する「咒棍」あるにあらずや。即ち益々此く解釋するの隠かなるを知る。(八)書經に龜
從筮從の句あり。當時已に筮の行はれしを知る。筮は八卦又は六十四卦による。豈
當時字書となす者あらむや。(九)上下經を字書とせば八卦を如何せん。文字なるか
若し文字とすれば、支那文字は八字を重ねて成立せし者なり。支那文字の發達は
決して然ることなし。

要するに易經は六十四卦三百八十四爻の意味を發揮せんとしたるものなり。而
かも其文章は八卦の卦象卦徳に因みて作られし者なれば自ら字書の如く見ゆ
ものみ。八卦に因める名稱を用ひしとが易經の根本的性質を知る上には必要な
ことなり。互體約象なども皆八卦の象や徳より思ひ付くとのみなり。從て易の
文章は自由自在に書き列ねられしものにあらず。八卦の象や徳に拘泥して以て
作られし文章なり。八卦の象や徳を十分に理解するにあざれば易の文章は到

底理解し難かるべきなり。

第七節 經典の權威

上下經は六十四卦と三百八十四爻との解釋なり。其の意義複雑にして之れを
概括するは極めて難事に屬す。若し尋常の書物ならむには例へば人生觀といひ
宇宙論といはんが如く、又或は政治論と言ひ、交際論といはんが如く、各一種の標
準思想を標題として之れに應ずる文句を集めて之れより抽象し概括し、次第に
積むで以て其系統をあすを得べし。然るに易の書たるや、此く自由に拔萃し來る
を許さず。何んとなれば六十四卦は各時を示めし、各卦内の六爻は此の時に於て
なすべき行動を示めしたるなる故。單に六爻の語のみを見て其の時即ち卦全體
の意味を顧みざるべきは全く易の精神を没却するに至る。故に三百八十四爻の
文章は通常の書物に於るが如く、自由に引用せらるべからず。若し引用せんとす
る時は卦全體の意味をも引用せざるべからず。恰も子を招かんとすれば親も共
に來るが如し。六十四卦三百八十四爻の中には政治思想あり、道德思想あり、處世

思想あり、教育思想あり、又何れに配當して宜きや分らぬ者もあり、今若し政治思想を發揮せんとする時は天子の位たる九五と六五との語を六十四卦より集め來るなれども、之れと共に六十四卦の語をも引用し來らざるを得ず、其の結果餘り亂雜に流れ統一する能はざるに至る。各人試みに之れを行へ、必ず其の然るを覺へん、即ち易の六十四卦に就いて之を見る時は一卦各一個の全躰をなし、其の中の一爻を切り離すとを許さざるなり。

易の文章は要するに處世上、道德上の訓戒なり、之れに習熟する時は、遂には一切の事に應用して、何等の礎礎をも感ぜざるに至るべきなり、唐の虞世南嘗て曰はく、易を知らざるものは、以て宰相となす可らずと、易を研究することに由りて一切の人情を知了するを謂ふなり、人情に古今なし、殊に易の作者は種々なる苦心を費やし、様々なる經驗を積むで、以て成功したるものあるべきが故に、其の世態人情を説く所に於ては、大に傾聴の價値あり、易の經文は茲に至りて、大に尊重すべしとなす、徒らに古人の書なりとして之を排斥せんとするは、易經を知らざるのみならず、一般に人生經驗の意味を、理解せざるものなり。

第八節 十翼の文

易の十翼は象象、繫辭、以上三者は各上下二篇に分る、併せて六篇、文言、說卦、序卦、雜卦、是れなり、史記の世家に云はく、

孔子晩にして易を喜む、序、象、繫、象、說、卦、文言あり、

と、此の文中序の字に就いては二種の讀み方あり、一は序は序卦の序なりとなすものにして、史記の正義是れなり、一は象象、繫辭、說卦、文言を序すと讀むもの是れなり、今前説に従ふ、雜卦を省けるは如何なる故にや明かならず、正義に據れば上象は卦下の辭、下象は爻下の辭とあり、又同く正義に據れば上象は卦下の辭、下象は爻下の辭とあり、普通の説と大に同からず、然れども上下經を分つに就いては、乾鑿度に云はく、

孔子曰はく、陽は三、陰は四、位の正しきなり、故に易卦六十四、分て上下となす、而して陰陽に象るなり、夫れ陽道は純にして奇、故に上篇は三十、陽に象る所以なり、陰道は純ならずして偶、故に上篇は二十四、陰に法る所以なり、乾坤は陰陽の

根本萬物の祖宗なり。上篇の始めとなすは之を尊ぶなり。離を日となす。坎を月となす。日月の道陰陽の經。萬物を終始する所以なり。故に坎離を以て上篇の終りとなすなり。咸恒なるものは男女の始め。夫婦の道なり。人道の興る。必ず夫婦よりす。祖宗を奉承して天地の主たる所以なり。故に下篇の始めとあすは之を貴ぶなり。既濟未濟を最終となすは戒慎を明かにして王道を存する所以なり。又曰はく。

泰は天地交通して陰陽事を用ふ。万物を長養するなり。否は天地交通せず。陰陽事を用ひず。万物の長ずるを止むるなり。上經は陽に象る。故に乾を以て首となし。坤を次ぎとなす。泰を先にして否を後にす。損なるものは陰。事を用ひ澤、山を損して万物を損するなり。下損して以て其の上に乗ふ。益なるものは陽。事を用ひ。而して雷風。万物を益するあり。上自ら損し以て下を益す。下經は以て陰に法る。故に咸を以て始めとなし。恆を次ぎとなす。損を先きにして益を後にす。各其の類に順ふなり。

此れに由りて觀れば上下經に分つは極めて舊し。繫辭傳に云はく

二篇の策万有一千五百二十

と。易經の上下二經に分るゝや極めて古し。其の經の字を加へて上經下經となすは何人に始まるかを明かにせず。而して象象等を分ちて各々上下二篇となすは乃ち上經の象を上象となし。下經の象を下象となすと明かなりといふべし。而して象には一卦全体の意味を解せるものと一爻の象を解せるものとあるなり。咸は前者を名づけて大象といひ。後者を名けて小象といふ。

十翼は固より上下經の後にあるべきものなり。今日傳はる所の易經は大概象を上下經の間に挟みて以て之を解する様にす。漢以後のとなり。之れに就いて後の易を論ずるもの曰はく。古易の面目全く失ふ。と然れども吾人は此事を以て此く大伽藍にいふべきものにあらざるを信ず。如何となれば經と翼とを別行せしむれば其れにて辨するに。殊更に複雑なるとあるにあらざればなり。宋に至り朱子本義を著し。復たび經傳を別行せしむ。現在の處にては或は朱子本を用ふる者あり。又或は混淆本を用ふるものあり。漢學先生は矢筈しく言ひ立つれども吾人易の思想を解せんとするものに取りては左程重要のところにあらず。

第九節 十翼非孔子之作

十翼は孔子の作なりといふは史記に始まる。然かも史記の當時にありては未だ雜卦あることなく、漢書藝文志に於て十篇とある以上は雜卦は蓋し其間の作なるべし。他の九篇が孔子の作なりやといふに吾人は最も大なる疑ひを有するものなり。其の證とする所種々あり。

- 一 雜卦が聖人の作にあらざることば史記に之なきによりて略ぼ明かなれども序卦の如きは其の内容に於て餘り牽強附會の嫌ひあり。此れ等を以て孔子の作となすは寧ろ孔子を誣ふるの感なくむばあらず。(伊藤東涯讀易私說)
- 二 子貢曰はく夫子の文章は得て聞くべきも、夫子の性と天道をいふは得て聞く可らざるなりと。若し十翼を以て孔子の作とあさば孔子の天道の説は性説とは凡夫と雖も之を解し得べし。子貢にして之を理解し得ざることあらんや。是れ知る。孔子の時十翼なかりしことを。
- 三 子曰の二字が時々發見せらるゝは疑ふべく、殊に顏氏の子其れ庶幾いかな

といひて己れの門人を以て聖經を解釋せんとするは殆んど想像し得べからざる處と爲す。(讀易私說)且つ孔子は哀公に向て顏回なるものありといへり。此れ禮なり。顏氏の子といふは禮にあらず。

四 孟子は孔子を尊信するものなり。十翼果して孔子の作ならば豈に一言の之れに及ぶものなからんや。

五 易は陰陽を以て根本となす。天の道を以て陰陽となし地の道を以て剛柔となし、人の道を以て仁義となし、兩々相對立せしむるは免るべからざる所なれども之を論語に參照する時は殆んど孔子の思想とは思はれず。易は易、孔子は孔子、孔子は易には仁義を説けども自己は乃ち一個の仁の字のみを説くとせしむるが如きことは非なるべし。若し易の原理として仁義の兩者あるならば孔子は必ず人の道を以て仁義の二者となせしむるべし。孔子をして易を信せしむれば恐くは此く仁と義となせしむるべし。

六 繫辭傳に精氣爲物、遊魂爲變、是故知鬼神情狀とあれども論語に子不語怪力亂神の説と矛盾するが如し。

七 歐陽修のいへるが如く十翼は繁勝なり。曰はく、前略其の説多しと雖も其の旨歸を要するに辞を繋げ吉凶を明かにするに止まるのみ、一言にして足るべきなり。凡そ此の數説なるものは其の略なり。其餘の辞は小く異なると雖も而れども大旨は則ち同じきものにて擧るに勝ふ可らず。謂ふに其の説諸家より出で、而して昔の人雜へ取りて以て經を釋く。故に之を擇んで精ならざれば則ち怪むに足らざるなり。謂ふに其の説一人より出るとすれば則ち是れ繁衍叢勝の言なり。其れ遂に以て聖人の作となさば則ち又大ある纏りなり。孔子の文章は易と春秋と是れのみ。其の言愈々簡にして其義愈々深し。吾れ聖人の作、繁衍叢勝の此の如きを知らざるなり。(童子問)

七 歐陽修のいへるが如く前後矛盾する所少からず。今其の一二例を擧げんか。歐陽修曰はく、文言に曰はく、元なるものは善の長なり。亨なるものは嘉の會なり。利なるものは義の和あり。貞なるものは事の幹なり。是を乾の四徳と謂ふと。又曰はく、乾元あるものは始めて亨る者なり。利貞なるものは性情なりと。則ち又四徳にあらす。此の二説が一人より出づると謂ふか。則ち殆んど人情にあらざるなり。

繫辭に曰はく、河圖を出し洛書を出だし、聖人之に則ると。所謂圖は八卦の文なり。神馬之を負ふて河より出で以て伏羲に授くる者なり。蓋し八卦は人の爲す所にあらす。是れ天の降す所也と。又曰はく、包羲氏の天下に王たるや、仰げば則ち象を天に觀、俯して則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜しきとを觀、近くは諸れを身に取り、遠くは諸れを物に取る。是に於て始めて八卦を作ると。然らば則ち八卦は是れ人の爲す所なり。河圖は與らず。斯の二説なるものは已に相ひ容るゝと能はず。而して説卦に又曰はく、昔者聖人の易を作るや、幽神明に賛せられて而して蒼を生じ、天を參にし、地を兩にして數を倚す。變を陰陽に觀て而して卦を立つと。則ち卦も又蒼より出づ。八卦の説是の如し。是れ果して何に従て出るや。此の三説一人より出ると謂ふか。則ち殆んど人情にあらざるなり。歐陽修の此れ等の論は實に味ひあり。伊藤東涯は此外に於て(一)繫辭は卜筮を尙び、夫子の雅言と異なるものあると(二)子思孟子共に夫子易を賛すといはざる(三)伏羲神農を稱するは、堯舜を祖述するの旨にあらざる(四)卜筮義理の二端相ひ錯して矛盾なるものあると(五)韓宣子魯に易象を見たりと稱すれば則ち易象は孔子の作にあらざると(六)

乾の四徳は穆姜の語に本づく(七)敬義直方は聖人の語ならざる(八)繫辭傳に所謂尺蠖の屈する云々とは老子の旨なる(九)繫辭に所謂機事密ならざるは是れ後世の事なる(十)等を擧げたり。

左傳襄公九年に曰はく。

史曰はく。是れを良の隨に行く謂ふ。隨は其れ出るなり。君必ず速かに出でよと。姜が曰はく。亡し。是れ周易に於て曰はく。隨は元亨利貞咎なしと。元は體の長なり。亨は嘉の會なり。利は義の和なり。貞は事の幹なり。仁を體して以て人に長たるに足り。徳を嘉みして以て禮に合するに足り。物を利して以て和するに足り。貞固以て事に幹たるに足る。然る故に誣ふ可らざるなり。是を以て隨と雖も咎なし。今我婦人にして亂に與る。固より下位に在り。而して仁あらざれば以て元と謂ふ可らず。國家を靖んせず。亨と謂ふ可らず。作して身を害すれば利と謂ふ可らず。位を捨てて姦す。貞と謂ふ可らず。四徳のものあれば隨て咎なし。我皆之れなし。豈隨ならんや。我則ち惡なり。能く咎なからんや。必ず此に死なん。出るを得じ。

と。文言に曰はく。

元なるものは善の長なり。亨なるものは嘉の會なり。利なるものは義の和なり。貞なるものは事の幹なり。君子仁を體して以て人に長たるに足り。會を嘉みして以て禮に合するに足り。物を利して以て義に和するに足り。貞固以て事に幹たるに足る。君子此の四徳のものを行ふ。故に乾元亨利貞と曰ふ。

と。前の穆姜の言と大同小異あり。歐陽修は此れを取りて文言は孔子の作にあらざるの一證となせり。伊藤東涯亦之れに賛す。其他の學者亦之れに賛するもの少からず。朱子曰はく。

古へ已に此の説あり。穆姜之を稱し。而して夫子も亦取ることあり。

と。實際此種の語は當時一般に行はれたる者にして必ずしも穆姜の作にはあらざるべし。然れども元亨利貞の四字を以て四徳とするは易の正解にあらず。故に文言を以て孔子の作となすは恐らくは否なるべし。河田孝成は一種の折衷説をなして曰はく。

孝成左傳を考ふるに宣子易象と魯の春秋とを觀て曰く。周の禮は悉く魯に在

りと。夫れ魯は本春秋ありて孔子之を筆削す。而して後世孔子春秋を作ると稱す。意ふに易の象も亦魯の有る所にして孔子之れを定むるなり。之を孔子の作と謂ふは亦猶春秋のごときか。但だ此篇大象を論ずるもの實に先王の大範にして因りて以て象名を専らにすれば則ち宣子の觀る所は蓋し是れなり。其の書辭を釋するものは象と撰を同ふす。乃ち孔子の贊述せる所にして魯の舊傳にあらざるなり。

と。孔子の見たる所の易象は今の象傳なり。此れ等を綜合して之を考ふれば十翼は或は孔子に先つものあり。或は孔子に後るものあり。文章雄渾なるものあり。繁勝にして讀むに堪へざるものあり。牽強附會にして取るに足らざるものあり。前後矛盾するものあり。要するに一人の作にあらず。孔子の見たるものありとす。も其は極めて一小部分のみ。而かも亦孔子の筆に成るにはあらず。葉水心曰はく。(水心文集)

大抵浮屠の鋒銳を抑えて、而して吾が有る所の道を示めさんと欲すると此くの如し。然るに十翼は孔子の作にあらざるを悟らざれば則ち道の本統尙晦し

と。宋代の哲學は十翼を以て根柢となす。然かも十翼孔子の作にあらざる以上は彼れ等は皆孔子の正統にあらざることと言へるものなり。然らば十翼は全く棄つべきかといふに歐陽修のいへるが如く、易義を發揮せしものとして大に參考の價值あり。廢すべからざるなり。

第十節 象象の別

十翼には象と爻を對立せしむる所多し。曰はく、

象なるものは象を言ふものなり。爻あるものは變を言ふものなり。(上繫辭)

又曰はく、

易なるものは象なり。象なるものは像なり。象なるものは材なり。爻なるものは天下の動に效ふものなり。此の故に吉凶生じて而して悔吝著るなり。下繫辭此れによりて見れば象の字は單に卦象の意味に用ひらる。象と爻とは相對稱せらる。爻辭のみを指して象といふの意は之を發見すると能はざるなり。而して下繫又曰はく、

八卦は象を以て告げ、爻象は情を以て言ふ。剛柔雜居して吉凶見るべし。と。故に象は卦に繋るの辞をいひ、爻は爻に係るの辞をいふ。而して象を解するもの亦之を名けて象といふ。是は唯だ古來よりの習慣にして別に意味あるにあらず。繫辞又曰はく、

知者其の象辞を觀れば則ち思ひ半に過ぎん。

と。此に象辞といへるは鄭注によれば爻辞なり。張惠言周易鄭氏義に曰はく、

鄭象辞を以て爻辞となすは乾鑿度に曰はく、陽は七を以て陰は八を以て象となす。象は變の數なり。中略 貴氏皆當爻を以て義を斷じ變動を説かず。爻辞は本爻の義を説く故に之を象辞と謂ふ此を以て之を言へば卦爻の辞皆名けて象となす。又、皆名けて象となす。其の卦爻の象に就いて而して之を象るを以て辞となす也。夫子卦辞の義大なるを以て既に象を作り、復た象を作り、以て之を明かにす。爻の義は小なり。唯だ象を作るのみ。

其れ然かり。但だ象交相ひ對するより見れば則ち象は卦辞、爻は爻辞なるべし。而して之を通じて、象又は象といふ。象先づ生ず。故に卦象より意味を解せしもの。

及。び。爻。辞。を。指。し。て。象。と。い。ふ。故。に。象。に。は。大。小。の。別。あ。り。象。の。如。く。卦。に。の。み。限。る。に。あ。ら。ず。従。來。の。學。者。が。爻。下。の。辞。の。み。を。以。て。象。と。な。す。は。恐。く。は。非。あ。る。べ。し。本。文。も。象。象。に。し。て。之。を。解。す。る。もの。亦。象。象。な。れ。ば。則。ち。見。る。もの。極。め。て。ま。ぎ。ら。は。し。き。が。た。め。に。特。に。之。を。區。別。し。て。傳。の。一。字。を。附。す。然。れ。ど。も。其。の。何。時。に。あ。る。を。詳。か。に。せ。ず。劉。氏。曰。は。く。

象は斷なり。一卦の才を斷するなり。〔集解〕

と。説文に據れば象は豕の走るとなす。音も義も斷となす。河田孝成曰はく、蓋し材用一路を言ひて而して變を言はざるを以て豕の斷決して走り、左右を顧みざるに譬ふと。〔周易訓疏〕 既に象なる以上は卦辞爻辞共に象なるは明かなり。然らば傳の字を附せしは何時に始まるか。毛奇齡曰はく、

特に文王易を演せし時、凡そ卦下に於て繋る所の辞を原と象辞と名づく其の爻下に在るものは原と象辞と名づく。故に孔子の象象は則ち皆傳の字を加へて之を別ち、之を象傳象傳といふは魏晉以前に在れども何時なるを知らず。又傳の字を脱し去る。或は謂ふ韓康伯之を刪ると、按するに魏の高貴郷公象象經

に連らなるの語あり、則ち但だ象象と稱す。己に傳の字なし、康伯の刪る所と謂ふは誤れり。但だ象の字解し難し。傳に曰はく、材なりと、亦義なし。但だ朱子が近世に至りて傳の字を附せしを以て近世に於る著明なる一時期とあすのみ。

王伯厚曰はく、昔し韓宣子魯に適き、易象を見る。是れ古人卦爻を以て統て之を名けて象と曰ふ。故に曰はく、易なるものは象なりと。其意深し。(惠徵君九 經古義)

易象といふを以て卦爻の辭となすに付いて異論あるは別記の如くなれども、兎に角、卦爻の辭共に之を象といふと見たるは卓見といふべきなり。

朱子發云ふ、古文周易上下二篇あり、孔子象象繫辭文言說卦序卦雜卦を作り、別に十篇をなす。前漢費直傳古文周易象象繫辭文言を以て上下經を解説すとある。是れなり。費氏の易は馬融に至りて始めて傳を作る。融、鄭康成に傳ふ。康成始めて象象を以て經文に連ぬ。所謂經文なるものは卦辭爻辭、通じて之を言ふなり。即ち費の傳に所謂上下經なり。魏の王弼、又文言を以て乾坤二卦に附す。故に康成よりして後、其の本、象曰、象曰を加へ、王弼より後、文言曰を加ふ。繫辭上下、說卦、序卦、雜卦に

至りては、則ち舊篇に仍る。魏の高貴郷公博士淳于俊に問ふて曰はく、今象象經文に連らならず、而して註に之を連らぬるは何ぞや。俊對へて曰はく、鄭康成象象を經に合し、學者に便せんと欲す。云云。則ち鄭の未だ易經を註せざるの前には、象象は經文に連らねざるなり。(易正義に云ふ、輔嗣の意以爲らく、象なるものは本と經文を釋す。宜しく相ひ附近すべし。故に爻の象辭を分ち、各當爻の下に附して之を言ふ。然らば則ち鄭氏象辭は未だ嘗て分たざるなり。)(張編簡周 易鄭氏義)乃ち象象を以て經文に連らねたるは鄭康成にして、文言を以て乾坤の下に列ねたるは王弼なり。正義によれば、此れに就いても異論なき能はず。乃ち偶然の問題にして、理論を以て決すべきにあらず。

第十一節 象象の時代

卦爻の辭に歴史的の事實を擧るもの多し。卦辭に就いて之を曰はんが、屯の象に曰はく、

屯、元亨。利貞。勿用有攸往。利建侯。

と、侯を建つるは即ち封建制なり。封建制度は周に至つて始めて大に備はれるものなり。夏殷二代の如きは從來の習慣のまゝに氏族の長を保存せり。故に建侯の句は周一統以後のことに似たり。殊に初九の建て侯たるに利しといふものは是れなり。小畜の象に曰はく、

小畜亨。密雲不雨。自我西郊。

伊藤東涯曰はく、互體に西郊の象あり。岐周よりして言ふ。故に我が西郊と云ふと。文王自ら言へりとなすなり。若し我が西郊といふを以て岐周なりとすれば是れ個々の事實なり。此句は又小過の六五に見ふ。更らに轉じて象辭に付いて之を見む。泰の六五に曰はく、

帝乙歸妹。以祉元吉。

帝乙は殷王なり。書の多士に曰はく、成湯より帝乙に至る迄明德恤祀あらざるなしと。帝乙に關することは不明瞭なれども後世學者の想像する所に據れば當時降嫁の禮特に盛んにして世の傳ふる所となるか。又或は尊貴を以て傲らざるが故に取りて以て象となすなり。何れにせよ殷の事實なれば爻辭が周以後のもの

のたるは疑ふべからざる所なり。朱子は之を以て帝乙其妹を嫁せしめんとせる時占して此爻を得たりとみせども其の説の取るに足らざることは定説なり。隨の上六に曰はく、

上六は之を拘係す。乃ち從て之を維ぐ。王用て西山に亨す。

西山は岐山なり。周の地に在り。王は文王をいふとは先儒多く其説あり。(周易新疏參考)乃ち文王の例を引いて以て此爻の象を説明せるなり。明夷の六五に云はく、

六五箕子之明夷。利貞。

箕子を引用せるは最も面白し。此れ亦事實を以て此爻の象を説明せるものなり。升の六四又曰はく、

六四王用亨于岐山。吉无咎。

岐山は周の舊都にして王と。いふは文王なり。此れ亦文王の事を以て爻の象を解せるものなり。歸妹六五に曰はく、

六五帝乙歸妹。其君之袂。

と。既濟の九三に曰はく、

九三、高宋代鬼方三年克之、小人勿用。

高宗は殷王なり、九五に云はく、

九五、東隣殺牛、不如西隣之禴祭、實受其福。

と、先儒皆文王と紂との事に當るとなす。此くして爻辭は殷周の事實を示めし、て以て爻辭の制作をして歴史的年代の位置を占得せしむ。卦辭は少なけれども、此れ亦多少歴史的位置を想像せしめざるにあらず。然れども其の人を詳かにせず。爻辭に云はく、

易の興るや、其れ殷の末世、周の盛徳に當るか、文王と紂との事に當るか、是の故に其辭危し。

易の興るや、其れ中古に於けるか、易を作るものは其れ憂患あるか。

易の制作は當時に於て己に明かならず、之を文王に歸し、周公に歸するも亦確かならず。蓋し一種の産物として傳はり居りしものならん。

第四章 易の思想と易書

第一節 易の根柢

易は變化を中心とする一種の思想系統なり、其の必然的條件として卦畫を有す。卦畫は陰と陽となり、此の卦畫のために餘儀なくせられて八卦六十四卦の生成あり、八卦六十四卦は單に陰陽思想のみにて起り得べきにあらず、卦畫を積むの法あるにあらざれば見るべからず、八卦六十四卦なければ易は見る可からざるなり、故に易は變化を中心とする一種の思想系統を包含すると同時に八卦六十四卦に關係する意味も亦之を包含するものなり。

八卦の意味如何、六十四卦の意味如何、此れ等は固より變化を中心とし、陰陽を根柢とするものなり、雖も陰陽思想、其者とは別種のものといふべし、適確に言へば、陰陽思想は易に特有のものにあらず、西洋にも之あり、一般に哲學として見るべきものなり、其の卦爻を生ずるに及びて始めて易の起るあるなり、吾人は陰陽思想が易の根本なるを信ずると同時に、兩者を別ちて二となすの必要なるを

信する者なり。假令ひ卦辭爻辭なくとも六十四卦の象を見れば、則ち自ら卦爻の性質を思ひ浮ぶることを得べきなり。但だ現在の卦辭爻辭と其の意を同ふするや否やは疑問なり。

第二節 卦辭爻辭

卦辭爻辭は本來六十四卦の意味を發揮したる者故六十四卦を見んとするものは必ず之れに據らざる可からずと雖も卦爻の辭は象を示すもの故象を見る範圍に於て之れに據るべきのみ其文章を以て悉く易の根本思想となすべからず。例へば大有の上九に

天より之を祐く吉にして利ならざるなし。

とあり。此一句は其爻に天より祐けらるゝの象あると言へるものなり。然れ共此を以て易が其根柢に於て天を假定し居るものとなす可からず。卦象としては天あるも之を易哲學の系統中にあるものとなすべからず。又睽の上九に
鬼を一車に載す

とあるも、此れ亦卦象を言へるのみにて易の信仰として鬼を假定し居るにはあらざるなり。卦象は種々様々なり。宇宙一切の事實なり。八卦六十四卦は宇宙一切の現象を網羅すと雖も、網羅するといふところが易の根本思想にして其中の何々を以て根本となすといふ点になると話しは全く別問題なり。天より之を祐くといふは其爻に此の意あるは疑ふ可からず。又當時此の爻辭を作りし周公其人の腦中に於ては天祐といふ一種の思想ありしならんも易が天を假定し天を以て信仰の對象とすとなす可からず。信仰は即ち時代に從ふて種々に變遷するを免れず。然かも易が宇宙を網羅するといふ根柢は則ち變ずるとなし。

易が宇宙を網羅するは信仰にはあらず。理論なり。故に易には天の象のみならず。凡ての象あり。さりとて凡ての象を信するにはあらず。若し天を以て易の信仰となさば新たに易の信仰系統を作らざる可からず。是の故に卦爻の辭を讀むものは文字の末に拘泥することなく卦象を探るの助けとなすべきのみ。

第三節 十翼

十翼は易の根本思想を發揮せんと勉めたるものなり。故に易の根本を窺ふ上に於て参考となるものあるは固よりなれども、十翼は同一人の作にあらざるが故に各々其の意味を發揮せざる可らず。此くして象の哲學あり、象の哲學あり、辭の哲學あり、文言の哲學あり、以下之れに準ず。是等を綜合して以て易の哲學が構成せられざるにはあらざれども、別人の作たる以上は然かするを以て穩かなりとす。

十翼が正しく易を解せしものなるや否やは確かならざれども、十翼を離れて易は知る可らず。恰も彖爻二辭を離れて卦爻の象を見出し得ざるが如し。去れば吾人が易を解するも亦彖爻二辭を通じ、十翼を通せざるを得ず。其中に於て易の根本思想と思はるゝ所と十翼特有の思想と思はるゝ所とを識別するを要するのみ。從て吾人が易の根本思想と十翼とを區別せんとすと雖も要するに吾人は十翼に於て易の思想の包含せられ居ることを信ずると同時に十翼の作者自身の思想又は少くとも時代思想の包含せられ居ることを信せざる能はざるなり。

第四節 易關係の思想

王弼の易を註するや、老子を以てし、智旭の註するや、禪を以てす。而して宋儒は一般に哲學思想を以てせり。同く之を天といふも、或は以て無なりともいふべく、或は以て自性ありともいふべく、或は以て絕對なりとも言ふべく、自己の見る處によりて如何様にも解釋せられ得べし。説の岐るゝ所以なり。

十干十二支の説を附して以て易を釋せんとする者あり。又河圖洛書の説をなすものなり。此れ等は何れも區別せられざる可らざる者なり。吾人は本篇に於て卦爻成立の由來と易書の構成とを論述せり。此れにて易の一般は理解せられたるべし。易哲學の一部は此處にて既に發表せられたれども、主として、易哲學成立の由來を説明するに勉めたるのみ、即ち先づ陰陽思想の世界に共通なるを述べ、八卦六十四卦の成立に及び、然る處之れを解する所以の典籍、即ち上下經及び十翼に及び、一言に約すれば、易の意味を發揮したるものなり。故に近く易に關して之を解説するを免れざりき。第二編に於ては遙か易の根本思想を論せんとす。

第二編 易の哲學

第一章 陰陽論

第一節 陰陽と人事

陰陽の思想が各社會を通じて共通なると及び其の包含的なるとは既に之を述べたり。其の人事に於る意味の一般を述べんか。陰あれば陽あり、陽あれば陰あり。二者は必ず相ひ伴ふ。物窮れば必ず通ずるは易の根本なり。易は以爲らく、万事其の極と思はるゝ場合に立ち至れば更に通ずるの道ありと、是の故に治の極は即ち乱となり、乱の極は乃ち治となる。幸あれば禍あり、禍あれば幸あり。苦あれば樂あり、樂あれば苦あり。陰陽常に相ひ伴ふ。古來興亡盛衰の跡を考ふるに一として然らざるなし。之を人事に考ふるに亦皆然らざるなし。

此の如きは易の根本として假定する所なり。陰陽相伴ふの思想は時間の内に

在るものあり、同時なるものあり、時間の内に在るものは治乱の相伴ふが如く、同時なるものは苦樂の相ひ半ばするが如し。故に苦中に樂を求め、樂中に苦を求む。何れも陰陽相伴ふの思想にあらざるなし。

固より易は論理的に之を考へたるにはあらず。漠然經驗の上より此く言ひなしたるに外ならざれば精密に之を論ずれば了解し難き處少からず。例へば治の極とは何んぞや、此れより以上の太平をいふ状態なるべし。歴史に刑措いて用ひざるもの二十年といふが如き其の一例なるべきも、之を以て治の極といふは如何にや。甚だ疑ひなきと能はず。殊に治の極が乱を生ずといへるが如きは最も了解し得られざるに屬す。之れと同く乱の極といふも亦實際之れと認め得べきものあるか。甚だ以て疑ひなきと能はざるなり。又乱の極が治になるといふも了解し得られざる所なり。治の極必ずしも乱にあらず、亂の極必ずしも治にあらず。去れば物窮れば必ず通ずといふは決して理窟に叶ひたるにはあらず。但だ單に治の後に亂あり、亂の後に治ありといへるのみにして歴史的事實の上より言へるに過ぎず。理論的絶對的の價值あるにあらざるなり。

之れと同じく、禍中に福あり、福中に禍ありといふも決して絶對的に然るにはあらずして多くの場合に於て然りといふべきのみ。

然るに易に在りては始めより陰陽の二原理を立つるが爲めに、一切万事を陰陽より觀察せんとする先入主となる的の傾向を有す。爲めに治亂興亡の跡を見るに一として陰陽あらざるなきが如く思はるゝなり。換言すれば陰陽を以て一切を判断しつゝありて、一切の事實のまゝに判定せんとするが如きとは絶て之れあるとなきなり。此れ獨り易を學ぶ者のみならず、易の作者其人も一度陰陽思想を立て、より悉く之れに由りて以て判断し了らんとせるなり。

第二節 陰陽と矛盾相對

事實に於ては此く漠然たるものあるにせよ、陰陽思想其者は反對若くは矛盾的相對を意味す。殊に矛盾的相對に於て其の意味を發見するものなれば、同時因果の思想が其中に包含せらる。此くして陰あれば陽あり、陽あれば陰あり、兩者は必然的に相伴ふ者となすは易哲學乃至一般に支那思想を研究する上に於て最

も注意すべきことに屬す。陰あれば陽あり、陽あれば陰ありといふ以上は陰は陽の原因となり、陽は陰の原因となるを意味する者なり。即ち所謂同時因果なり。若し此の思想を推演する時は禍あるが故に福あり、福あるが故に禍ありとなす。其れのみならず、一切の反對なる概念は皆因果の關係ありとせらるゝなり。動は靜の原因、靜は動の原因ありとなす如き是れなり。此の思想は支那の思想界を支配し支那の傳説となれり。今其の一二例を引用せんとす。

第三節 易と老子

老子の書中には最も善く矛盾相對の思想を發見するを得。曰はく、道の道とすべきは常道にあらず、名の名とすべきは常名にあらず。

と。此に常道常名といへるは絶對の道、絶對の名といふとなり。常は常住にして不變の意、時間空間を超越するの意、即ち絶對を意味するなり。常道は即ち絶對の道にして別に解し難きとはなけれども常名といふは如何かと思はるゝなり。然れども名は即ち名にして物の體を指すものなれば、常名が常道と同一のものな

るや明かありとす。而して道の道とすべきといふは、道を道として規定するの意なり。道と規定すれば道にあらざるものあり、道に非ざるものに對する道は即ち比較的相對的の道にして絶對的の道にあらざるといふなり。名に就いても亦同じ。故に又曰はく、

天下皆善の善たるを知る。是れ惡のみ。天下皆美の美たるを知る。是れ不美のみ。と。美といふべきは不美に對するもの故。比較的相對的の美にして眞の美にあらず。眞の美にあらざる故に、之を不美のみといふなり。善の善たるを知るも此れは善と規定し得べきものなり。此の如きものは即ち不善に對するものにして比較的相對的のことに屬し、絶對の善にあらざるなり。絶對の善にあらざるが故に、是れ不善のみといふ。通常人の限を以てすれば則ち天下皆見て以て善となす所のものは眞の善にして毫頭不善のあるべき筈なし。然るを老子獨り此くいふ所以する所は仁義の興らざる以前、何等の名稱の附すべきものなき時に存す。去れば其の論法が規定と超越、更に換言すれば矛盾相對超越の觀念にしてAあれば非

Aあり、非AあればAありといふ一種の同時因果説に外ならず。即ち陰陽思想より出でたるものごなさざる可らず。曰はく

故に有無相生じ、難易相成り、長短相形はれ、高下相傾き、音聲相和し、前後相隨ふ。是を以て聖人は無爲の事に處し、不言の教を行ふ。萬物作して辞せず。云云。是を以て聖人は其身を後にして而して身先だつ、其身を外にして而して身存せり。以て私なきを以てにあらざや。故に能く其の私を成す。

此れ亦陰陽反對の思想と、反對超越の思想とを含むや明かあり。之れと同意にて曲れば即ち全じ、枉れば則ち直なり。窪なれば則ち盈つ、弊なれば則ち新なり。少ければ則ち得、多ければ則ち惑ふ。といへり。又曰はく、

進道は退くが如く、上徳は谷の如く、大白は辱はしきが如く、廣徳は足らざるが如く、建徳は偷かなるが如く、質眞は渝るが如く、大方には隅なく、大器は晩成す。大音は希聲す、大象は形ちなし、道は隠れて名なし。云云。

大成は缺けたるが如く、其の用敵へず。大盈は沖しきが如く、其の用窮まらず。大

直は屈めるが如く、大巧は拙なる如く、大辯は拙なる如し。無爲をなし、無事を事とし、無味を味ふ。是を以て聖人終に大を爲さず、故に能く其の大をなす。

此れ等は直接に絶對の意味を表はせるものなり。

重きは輕きの根たり、靜かなるは躁の君たり。

其の雄を知りて其の雌を守れば天下の谿となる。天下の谿となれば常德離れず。

此れ等は相對を超越せんとするにはあらず、寧ろ陰陽兩者の中にいて重きを陰に置かんとするものなり。陰符經の思想を參考すれば則ち明かなり。

故に貴きは賤しきを以て本となし、高きは低きを以て基となす。是を以て侯王自ら孤寡不穀と稱す。此れ其の賤しきを以て本とするか、非か。

是を以て聖人は能く其大をなすなり。其の自ら大とせざるを以て故に能く其の大をかす。

將さに之を喻めんとする者は必ず固く之を張る。將さに之を弱くせんとする

ものは必ず固く之を強ふす。云云
道の常は爲すとなし。而かも爲さざるとなし。侯王若し能く守らば萬物將に自ら化せんとす。

即ち聖人の大は絶對の大なり。絶對の善、絶對の効を收めんとするものは一時は損小する所なかる可らず。尺蠖の屈するは伸びんがためなる如く、大に爲すあらんとするものは尋常一様の事にては不可なり。凡て此心得にて實行すべしといふなり。乃ち損と大利、損に對する利にあらずとの相ひ對する所に陰陽の概念を應用したるものなり。故に言葉の上にては奇矯に聞え、不可思議に聞ゆれども、其意味は乃ち異しきとなし。陰陽相對の思想、陰陽因果の思想は最も善く此に見はれ居るものといふべく、老子の根柢が易と合一し居るは吾人の信じて疑はざる所なり。

又一般に老子が權謀術數に流れ、變幻出沒測る可からざるが如きものあるは易の變化を尙ふと相似たる所あり。此れがため古來老子を以て易に出るとなすものあり。吾人も亦老子を以て易の陰陽思想に負ふ所ありとなす。

第三節 易と莊子

老子既に易と根抵に於て一致する所あり、乃ち老子の徒、莊子が易の思想より出るものあるは異しむに足らざるなり。莊子は易の陰陽語を藉りて曰はく、

凡そ事若くは小若くは大道あらずして以て惟成すると寡し、事若し成らざれば則ち必ず人道の患あらん、事若し成らば則ち必ず陰陽の患あらん。

と。當時陰陽の語は社會共通のものたりしなり、乃ち易の思想の當時に流行し人心を支配しつゝありしとを知るに足る。殊に矛盾超越の思想は最も多く之を莊子の書中に發見するを得、殊に齊物論一篇を然りとす、曰はく

彼是其偶を得るなき之を道極といふ。

と。即ち絶對は比較相對を超越するをいふなり、莊子はAと規定すれば非Aを生ず、兩者相對なり、絶對は即ちAにもあらず非Aにもあらざるものとなすなり。齊物論一篇の主意は實に此に在り、齊物論は乃ち物論を齊ふせんとの意にして是非といひ邪正といふ、皆五十歩百歩の論にして道にあらざることを證明せんとせ

るに外ならず、故に曰はく、

道は小成に隠れ、言は榮華に隠る、故に儒墨の是非あり、以て其の非とする所を是とし而して其の是とする所を非とす。

と。絶對より見れば是もなく非もなし、曰はく、

是れも亦彼れなり、彼れも亦是れなり、彼れも亦一是非なり、此れも亦一是非なり、果して且つ彼是あるかや、果して且つ彼是なきかや。

と。其他此種の言甚だ多けれども此に之を畧す。易は陰陽をいふ、陰陽の間に同時因果を假定す。然れ共超越を説かず、易に太極あり、是れ兩儀を生ず、兩儀四象を生ず。云云といふことあれども太極は陰陽を超越する絶對の意味にはあらず、少くとも老莊の如き道にはあらざるなり。老莊は陰陽思想より出でて寧ろ之を活用せんとしたるものといふべし。老子に於て殊に其の甚しきを見るなり。

第四節 易と太極圖說



宋の周茂叔曰はく

無極にして太極、太極動いて陽を生じ、動くも極まりて静かなり、静かなるも極まりて復た動く。一動一静互ひに其の根となり、陰に分れ陽に分れて兩儀立つ云云

此に動の極といひ静の極といふは果して如何なる意か、殆んど理解すると能はず、動の極といふあらば其は果して如何なる状態か、静の極も亦同じく殆んど想像すると能はざるなり。人間ならば疲勞の極といふとなきにもあらず、然れども此れとても程度問題なり、静の極といふことにしても亦同じ、況して自然界に於いて動の極、静の極などいふところのあるべき筈なし。一動一静互ひに其の根となるといふも亦同じく吾人の想像し得ざる所に屬す。周子自身と雖も考一考すれば則ち必ず吾人と同感なりしならん。然るに嘗て之れに付いて考へたることなく、但だ古來習慣のまゝに此の文句を並べたるに過ぎざるなり。乃ち陰陽因果の論理は一種の社會的傳説となり、學者の腦髓を支配し、全然疑問の餘地なからしめたり。易の陰陽が如何に社會の傳説となりしか、學者が如何に支配せられしか、易の根本思想の如何に強かりしかを推すに足るべし。

第五節 易の陰符經

陰符經は蓋し漢代の作なり、僅かに四百餘言の小文章なれども陰陽の思想を發揮したる所に於ては之れに如くものなかるべし。大意は陰中陽、陽中陰を主張し、陰と陽とある中に就いて重きを陰に置かんとするものなり。

陰符經は道家の經典なり。道家は水火を以て二大根本となし、之を以て陰陽を代表せしむ。水火は即ち坎離なり。坎  は其形に於て既に陰中陽を示め、離は  其の形に於て既に陽中陰を示めず。坎離兩者を以て中心となすなり。參同契

に坎離匡廓とある是れなり。匡廓は即ち包含の意なり。坎離が宇宙を包含することを言へるものにして、獨り參同契や又は陰符經に限りたるにはあらず。所謂道家は皆之を以て中心となすなり。陰中陽は即ち禍中の福にして、逆境の中に順境の曙光を認め、衰退の中に挽回の機運を發見する如き是れなり。陽中陰は是れに反するもの、即ち福中の禍にして、盛榮の間に衰退の徵候を見出し、順境の中に逆境の因子を識別するもの、是れなり。然れども陰符經が陰陽の相對を理解するは

少しく老莊と異なるものあり。老莊は陰陽超越の意味を取りて其の根本となせしが陰符經は陰陽に付いて四種の意味を取れり。

(一) 陰の中に陽の種子あり、陽の中に陰の種子ありとなすもの(必ずしも原因にあらず必ずしも結果にあらず、即ち因果關係にあらざるもの)

(二) 陰陽互に因果をなすもの。

(三) 陰陽を超越する絶對の思想あること。

(四) 陰陽兩者の概念に就いて陰に重きを置くこと。

一に就いては今述べるを要せず。經に曰はく

生は死の根、死は生の根、恩は害より生じ、害は恩より生ず。

と。此れ陰陽因果をなすの理を説きたるものなり。經に曰はく

天の恩なくして而して大恩生ず、迅雷烈風蠢然たらざるなし。

と。此れ即ち老子流の思想にして、恩なしといふは比較的相對的の恩を施さざるをいふ。大恩生ずは即ち絶對の恩の生ずるをいふなり。絶對の恩は即ち大恩なり。

經に曰はく

天の道を觀、天の行を執れば盡くせり、天に五賊あり、之を見るものは昌ふ。

と。五賊とは五行をいふなり。五行が相互に剋する所より名けて賊といふ。通常人の見る所は表面にして陽なり。經の見る所は裏面にして陰なり。是れ亦陰に重きを置きたるものと見るべきなり。又曰はく

天殺機を發し、星を移し、宿を易ふ、地殺機を發し、龍蛇陸に起る、人殺機を發し、天地反覆す。

此れ亦陰肅の氣の大効力あることを認めたるものなり。又經に天の至て私なりといへるも、同く私の字を用いて、以て陰に重きを置くことを示したるものなり。

易の陰陽が其の本來の意味に於ては自然界に於る現象の物体、性質、狀態、位置等盡く之を包含せざるとなきは己に之を述べたり。然れども陰陽の思想は矛盾的反對の意味を含有するがため種々なる意味を伴ひ來れり。老子莊子の如き周子の如き何れも、陰陽の概念を因果の方面より發揮したるものなり。而して陰符經はあらゆる方面より最も完全に之を發揮せんとしたるものなり。陰陽の思想は種々の意味に解釋せらるる者なるが以上は其の大略なり。易を解するもの數

十百家、何ぞ其れ限りあらんと雖も、而かも老子周子陰符經の如きは其の最なるものとして見ざる可らざるなり。

第六節 陰陽思想の應用

以上に於て陰陽思想が如何に廣く支那人心を支配せしかを知るべし。然れども以上述べたる處は決して易哲學全体にはあらず。所謂易の陰陽思想其者のみ。陰陽思想其者に付いて此の如く種々なる意味あることを明かにするにあざれば易の哲學は遂に明かなるゝ能はざなり。

而して陰陽思想は至る處に行はれ、一から十迄陰陽を以て標準とささるるなし。去れば陰陽より分れ出でたる格言の如きも亦少からず。例へば禍福は縁れる繩の如し。苦は樂の種樂は苦の種といふが如き是れなり。陰陽思想が此く迄廣く行はるゝは、乃ち易の根本思想が獨り哲學上のみならず、社會一般に弘通せられつゝあるものとして見るべきなり。

然りと雖も吾人が本章述べし所は要するに殆んど文字に見はれざる所のも

の而かも易の根本たる者なり。是れより以上更に一層易に近き所に就いて論述せんと欲す。

第二章 六十四卦の哲學

第一節 一卦の意味

卦は時を示めし、爻は位を示めすとは前編に於て述べたる所なり。六十四卦ある以上は即ち六十四の時勢あるなり。古文に於て時といふ。今日の時間又は時勢の意味のみにはあらず。状態、作用等の意味あり。而も六十四は何れも人事に關係するものとして見るべし。従て吾人は六十四を以て人生の各方面を代表するものとなさんとするなり。例へば水雷を屯となすも屯は人間生活の困難なることを意味するものといふべく、雷水を解とすも亦人間生活に於て困難の解除せんとする者といふべきなり。人生には種々なる方面苦くは事柄なり。六十四は兎に角人生に關する何者かを示めすものと謂ふべきなり。

之を自然界の現象として解す、固より解し得られざるにあらず。八卦は自然現象の象なり。故に六十四卦何れも自然現象としての意味なきはなし。屯を雷雨交至るの象となし、雷水を雷雨至りて雨晴るゝの象となし、水山を水山上に在るの象となし、地天を陰陽の氣交るの象となすが如き一々擧るを要せず。此く自然現象として觀察せられざるにあらずるも之れにては重要な意味を發見すると能はず。但だ單に人事に關するものとして觀察し、而る後大に其の意味を發見し得べきのみ。去れば六十四卦は要するに人生に關するものとして見るべく、六十四卦は人事の六十四の異方面を見たるものと謂ふべきなり。

第二節 六十四卦の人生觀

六十四卦の各一に就きて其意味を求むれば何れも時勢を示めし、各爻は其位を示めすと前述の如くなるが之れにては六十四の斷片的智識を得るのみにして綜合的に全體としての智識を得ること能はず。此に附いて余は數年前苦心して漸く六十四卦を以て人生の各方面を表はすものと見做し、更に之を十七に分

ちて以て益々綜合的に理解することを得たり。因りて嘗て研經會に於て聊か卑見を開陳し、又比較的通俗的に丁酉倫理研究會に於て此の説を述べたることあり。丁酉倫理の分は多少本文と重覆の處もあれども余が易に對する見地を明かからしめ、一面には易の一般をも明かならしむるために其儘之を收載せんとす。易の記述が餘り抽象に過ぎて了解し難きものあるを救濟するの効あるを信するものなり。

此の周易六十四卦の話は、全体餘りスペシヤルであつて、興味が無いだらうと思ふけれども、易の専門の方面から見ると興味あることと自分は信じて居る。斯う云ふ意見は腦髓を破壊するやうな恐れがあつて随分精神を刺激すること、思ふ。

全体六十四卦の順序と云ふのは、周易に於て一定して居るが、此の順序が必ずしも學理的でないことと云ふことは六十四卦を一目見れば能く分る。十翼の中の最後に序卦傳と云ふのがあつて、六十四卦は斯う云ふ道理の順序であると云つて書いてあるけれども、夫は全然牽強附會の説で聖人が書いたとは思はれない。夫は

兎に角六十四卦の排列夫れ自身に於て學理的でないと思ふ。所で六十四卦の順序は今の順序と取換へた方が宜からう、他の新しい順序に排列せらるゝであろうと云ふ考へはどう云ふところから起つて來たかと云ふと、周易を哲學として抽象して見たいと云ふ研究の結果から出て來たのである。周易には上經下經と、其他に十翼と云ふのがある。十翼は普通の文章であるからして其十翼各篇に於て哲學を抽象することは容易く出来る。例へば上象、下象、上象、下象、上繫、下繫、辭、文言、說卦、序卦、雜卦の哲學のやうな工合に、各篇に於て其哲學思想を抽象することが出来る。夫れに依て十翼全体に亘つて抽象すると云ふことは出来ないことではない。所が上經下經になるとどうも一つに纏めて哲學的系統として一種の思想を現はすことは出来ない。どう考へても上下經から哲學の系統を編出すと云ふとは困難である。上下經は六十四行列して長い間歴史的に此の順序で排列されて居るから之を崩すとも出来ない。崩さないで考へて見るとどうかと云ふと言葉が餘り簡單で其上六十四卦もあるが如何にも種類が一様でないから、六十四卦の方面に於て哲學を抽象することは出来ない。

次に何か之を西洋の哲學流に考へたならば六十四卦を解釋し得ることは出來まいか、其点に於て苦心して見たのである。どうかして六十四卦から哲學思想を抽象して見たい、一種の哲學を作つて見たいと考へたが善い考が出なかつたと云ふのは六十四卦は皆六爻から成つて居つて、一、二、三、四、五、六と下から六本ある、一番始めが人民の位、次が士、次が大夫、次が公卿、次が天子、其次が無位の位地と云ふやうな譯で社會的の順序に當嵌つて居る。例へば乾の卦に就て言ふと「初九潜龍勿用」とあつて人民であるから意見を出したり何かする事はせぬ方が宜いと云ふ、第二は士のことが書いてある、龍が初めて田に出た所であるから「九二見龍在田利見大人」と書いてある。九三は乃ち大夫今で言ふと縣知事位の位置で段々貴顯に近い、夫れで「九三君子終日乾々夕陽若厲无咎」と書いてある。九四は宰相の位或は公卿の位であるから「九四或躍在淵无咎」と書いてある。九五は天子の位であるから「九五飛龍在天利見大人」次に「上九亢龍有悔」と書いてある。天子の位が無位の位置で夫れを社會的位置に當嵌めてある。其社會的位置に相當した言葉が書いてある。去れば崩して哲學思想を抽象することは困難である。

或場合には斯う云ふやうにやつて見た、一番下の人民はどう云ふことをやるべきか。云は、人民の處世訓とか道德訓とかいふ様に考へて見た事がある。夫から士は如何様にやるかと云ふことを下から二番目の爻辭を六十四合せて考へた事もある。三番目四番目のものも同く六十四の言葉を夫れ／＼集めて來て大夫は、どう云ふ位或は公卿は、どう云ふ位と云ふやうに考へて見たこともあつた。其の次の五は天子の位であるから天子は、どう云ふ行ひを爲すべきかと云ふとを矢張六十四合せて考へたこともある。或は在野の賢人は如何様にすべきかと全体六ツに分けて考へて見たならば哲學思想を抽象することが出來まいかと思ふのである。併し、さう云ふ工合にやると全く六十四卦の言葉を彼方からも此方からも集めて來るだけに止まる。而も夫れが六章だけと極つて來る。夫では餘り意味が淺薄で面白くないと思つたのである。

其處で今度は改めて考へて見るのに周易の六十四卦と云ふものは何を示して居るだらうか。六十四卦の各種を考へると或は天地自然の現象に關係のあるものもある。又食物とか或は井と云ふやうな極些細な事に關係のあるものもあ

る。或は單に太陽が昇るとか風が氷を解くと云ふやうな工合に性質若くは活動に關係のあるものもある。六十四といふと數は少ないやうだけれども、示して居る種類は甚だ多數である。ソコで此方面から考へたけれども、矢張統一が出來悪い、併し周易の六十四卦を論ずる場合には折角昔からの聖人が一卦は一卦として有する意味を持たせて居つたのであるから、其積りで系統を作つて見なければ面白くないと考へて、自分は斯ふ云ふことを考へたのである。夫は、六十四卦は今いふたやうな工合に種々の現象を示して居るけれども、何も人間社會に關係がある、直接間接に關係を持つて居る、其關係とは、どういふ方面かと云ふことを聯想したのである。例へば井がある。井と云ふものは如何に人間社會に關係するかと云ふと人間を養ふと云ふ方に解釋する。或は鼎と云へば物体であるけれども、矢張人間社會に關係する。ヒューマンライフの中の養ふと云ふ中に含まれて居る。或は竹の節と云ふやうな卦があるが、矢張人間の節操と云ふやうに解釋される。其他太陽が昇るといふ卦は、矢張人間が段々立身出世する意味に解釋される。夫れであるから六十四と云ふものは直接關係に皆ヒューマンライフの一方

面を示したものであると考へた之が最後の考へであつた。

然らば此考へに従つて六十四卦を排列したならば面白くなからうかと考へた、其の大体の意味をいふと斯う云ふことになる。ヒューマンライフと云ふべき各方面を分類するには如何様にすべきか、之れがナカ／＼問題であらうと思ふけれども兎に角周易六十四卦はヒューマンライフの各方面を書いたものである。其方面はどんなものであるか、分け方の精密であると精密でないとは別として兎に角六十四卦に依つて考へたらどうかと云ふと、人間の立身出世と云ふものを示した卦が随分ある。又結婚を解釋した卦も随分ある。旅行、又は朋友の義理を解釋したものもある。又物を贈る受ると云ふことを解釋したものもある。又困難若くは逆境に處することを解釋したるものもあり、或は順境に處することを書いたものもある。其他言はなくとも大概想像が付くと思ふ。けれどもさう云ふ場合にヒューマンライフの各方面を解釋したものと見ると六十四卦全体を考へても此の如き意味が出て來ると思ふのである。夫であるから更に斯う云ふやうに縮めて學理的にヒューマンライフと云ふものを分析する、其れが十になり

或は二十になる。其處に持て行つて六十四卦を排列すると完全なる周易六十四卦の系統が立つと自分は考へた。ソコデスツカリ順序を直して分類したが其分類が果して精密であるかどうか疑問である。此の分け方は必ずしも一各人致するとは出來まいと思ふ。夫が一つ困る点である。モウ一ツはさういふ學理的の種類の仕方では排列した所で、一卦で兩方に關係したものがあつた。此困難を許すとすれば今いふたやうな順序に直すことが出来る。夫れで先づ一段落である。

ソコで周易と云ふ書物は如何に利用すべきかと云ふ段になる。元來周易と云ふは元卜筮の書であるといふ人もあるが夫は別として、一種の處世上の訓戒として解釋する方が面白いかと思ふ。其卜筮を排除して全く處世訓道徳訓として後に今學理的に排列されたものを應用することが出来る。どう云ふ工合に應用するかといふと自分が今度結婚しやうと思ふ。其時には今迄はトひで卦を出して周易をアテにしたがさうでなく結婚の處を聞いて見て昔しの聖人は何といつて居つたか、夫れを參酌する。或は戰をする時には戰さの卦を見ると戰さに對する心持が分かる。或は朋友と交際する場合にもさうである。矢張其處を聞いて

見て交際のとを知ると云ふやうになる。斯様な工合にすると周易といふ書物が唯卜筮といふ方面から効力があるのではなくして人々の實際生活の伴侶となるものである。所で其等の周易などをアテにするのは今日の人から見て差かしきことかどうか、他の言葉で云ふと周易に夫れだけの價值があるかどうかと云ふ一段になる。夫は人々の見解で斯んなものはアテにならぬといつて終へば其迄であるが自分の考へでは大變アテになると思ふのである。併し周易の言葉を作つた人々は孰れも海に千年山に千年餘程效の老けた人間で處世に就ては随分精神を練つた人であると思ふ。文王とか周公とか、作つたか否やは別として社會に經驗のある人が書いたものに違ひない。社會に經驗のある人の言ふたことは極平々凡々の中に意味がある。さういふ所から考へると確かに周易を伴侶として相談相手として宜いと思ふのである。之は周易を最負目に見たやうな解釋であるが最負目ではない。福澤先生が獨立自尊といふを云はれた、そんなことは難作もなく言はれるやうに思れるが其獨立自尊と云ふ言葉を初めて作るのが困難である。餘程世の中に熟れた人でなければ出來ないと思ふのであるか

ら平々凡々の中に動かすべからざる格言がある。夫は學問ばかり發達したのでは學問上の理窟は旨くなるが平々凡々の中に廣大無邊の意味を發見すると云ふやうなことは出來ない。故に議論の上から云つても相談相手にすると云ふことは真理のあることではないかと思ふ。けれども夫は人々の思ふ所に依てどうかと思はるゝのであるが自分ではそう考へて居る。之は第三段になる。夫から周易を何故に處世上道德上の訓戒として相談相手にする、自分の座右に置くときはどう云ふ心持を惹き起すかと云ふことを一言しなければならぬと思ふ。處世上の訓戒例へば朋友と交るとか或は旅行するといふ様のは之は古代とか今とか時代の變遷によつて變はるべき者ではない。元より朋友間の交際は細かいことになれば違つて居るが根本の心持は異なるやうなことはない。其根本の心持を修養するそれが周易の好い所ではないかと思ふ。例へば人と交はるに道德上の考へがなく交つてはいかぬとか幾らか自分の腹の修養が出來て居つて交はる。さういふ考へがあつてやる方が宜いか。或は又逆境に處したときは尙更のことであるがどう云ふ心持でやつたら宜いかといふやうな根本の心持を

作つて置くといふことに就ては確かに周易が一の助けになると思ふ。之は先づ第四段にあるのである。

夫から又最後に一つ周易からしても吾々が益を得る点は斯う云ふことにあると思ふ。逆境に處して泰然自若として居り、順境に處して必ずしも順境のまゝに喜ばない。さういふ精神状態を養ふのが肝要な点ではないかと思ふのである。言ひ換れば人間の精神と云ふ者を通常の感情状態より更に一段深くせしめて社會に處すると云ふやうな意味合になつて来る。だから愉快に無闇に騒ぎ廻ると云ふやうなことはしなくなつて来る。愉快に騒いだり或は直ちに哀んだりすることは或意味からいふと宜いことであるけれども矢張腹に耐へると云ふに至つては左様でなく通常以上に進んで腹の置場を極めて置く方が宜いと思ふ。後世の道家は一般にさういふことをやつた。ツマリ吾々が周易の書物の中から認めたる實際上の價值は其点から云つて疑ふことは出來ない。之で第五段になる。先づ大体の要点はさういふ所に止るのである。

以上は余が講演の大要なり。余は嘗て某大學に於て易の政治思想を講義した

るとあり。乃ち六十四卦より九五六五の象を引き來り之を解したるものなり。又易の處世思想を述べたるとあり。乃ち六十四卦より初九初六の爻辭を主として引用し來れるものなり。今より之を思へば支離の弊甚し。然るに十七に分ちて之を論せしより始めて易の六十四卦を明かにするを得たり。然りと雖も此の如きは決して六十四卦の各一の意味にはあらず。六十四の生存する所以の意味 *raison d'être* 也。此を解するにあらざれば六十四卦は離れて六十四となり。何等連絡を發見するも能はず。恰も一個の生物が生活力を失ひて支離分裂するが如し。支離の說明は六十四卦各一の說明なり。本章述る所は即ち支離の說明にはあらず。支離を貫徹する所の根本原力即ち生活力の說明なりとす。此点に於て本章の說明は實に陰陽に次いで根本的なるものと謂ふべきなり。

第三節 六十四卦の名稱

六十四卦の名稱は何時頃の作なりやは明かならず。周初に於て之れありしこと以外は確實ならず。六十四卦の名稱は何れの處より來りしか。即ち如何なる方

法にて命名せられしか。今暫く之を考へんとす。彖傳は多く卦に名づくるの義を解せり。屯の象に曰はく。

屯は剛柔始めて交りて難生ず。

即ち剛柔始めて交るは震の卦に付いていひ、難生ずるは坎の卦に就いていふなり。難生ずるが故に名けて屯といふとなり。又蒙の象に曰はく。

蒙は山の下に險あり。險にして止まるは蒙。

此れ亦卦徳を以て卦名を解くものと見るべきあり。需の象に曰はく。

需は須つなり。險前に在るなり。剛健にして陥らず。其の義困窮せず。

此れ亦卦徳を以て卦名を釋するものと謂ふべし。其の他此類一々擧ぐるを要せず。然るに又卦體を以て卦名を解せるものあり。師の象に曰はく。

師は衆なり。貞は正しきなり。能く衆を以て正す。以て王たるべし。

衆といふは卦象にもあらず。卦徳にもあらず。卦體陰の衆きをいへるなり。又比の象に曰はく。

比は吉なり。比は輔なり。下順從するなり。


此れも亦然り。下といふは下方にある四陰をいふものにして卦の形體より解したるものなり。又小畜の象に

小畜は柔位を得て而して上下これに應ずるを小畜と曰ふ。

とあるも亦然り。凡て一爻に付いて柔と曰ひ剛と曰ふは皆卦全體の形體を觀察し、其中なる陰爻、又は陽爻に着目したるものなる故、之を卦體より解釋したるものといふなり。陰陽の爻數を主として立言したるものは皆卦體なり。臨の象に臨は剛浸くして長ず。

とある如きも正さに陽の盛長を指せる者なり。其餘之れに準ず。今一々説明せず。又卦變を以ていふものあり。例へば隨

隨は剛來て柔に下る。


と之れ蠱  と錯する所に付いていへる者なり。剛は蠱の上九をいふ。隨

に來りて初九たり。故に來りて下るといふなり。象は皆錯卦の卦變に就いて義を取る。故に同様に

蠱は剛上りて柔下る。


といふ。尙第一編錯卦の條を參考すべし。又或は單に卦の形よりいふものあり。卦體と卦形とは同じき様なれども、前者は卦全體の形體をいひ、後者は卦の形の他の物象に似たるをいふなり。例へば鼎の象に曰はく、

鼎は象なり。

と是れあり。鼎は即ち形ちに象れるをいふなり。或は又卦變、卦德、卦象、卦體等を盡く採用し來りて以て之を解せんとしたるものあり。例へば恆  の象に

恆は久しきなり。剛上りて柔下る。雷風相ひ與す。巽にして動く。剛柔皆應するは

恒。

とある是れなり。剛の上りて柔の下るをいふは咸の卦より變じ來れる處をいふ。雷風相ひ與す(動くの意)といへるは卦象を以て言ふなり。巽にして動くは卦德なり。剛柔皆應するは各一爻に就いて言へるものにして即ち卦體なり。此外或は卦德卦象を以てするあり。或は卦變卦德を以てするあり。今一々贅せず。但だ象には卦名を釋せざるものあり。例へば頤  に「頤は貞吉とは正を養へば則ち吉なるなり云々」といへる如き是れなり。

要するに卦名の來る種々あり。卦象よりするものは例へば水雷を屯といふは屯は艱難の意味にして、雷雨交至るの象ありとなす如き是れなり。又山水を蒙となすは水の行いて山に逢ひ、進む所なくして止まるは即ち彼の童蒙の何れの方面に向て發達するか分らざるに似たりとなすが如き是れあり。卦德は即ち屯に於て震を動となし坎を陷るとなす。動いて險中に陷る。故に艱難の意ありとなす如き是れなり。屯の如きは即ち卦德卦象の二方面より命名せられたる者といふべく、六十四卦中大部分は此等兩方面の意味を有するに似たり。或は又卦形よりするものあり。頤、噬嗑、節、鼎の如き是れなり。古來卦體、卦形を混同すれども余は之を區別することを以て一層易の眞意を得るに近しとなす也。又卦體を以ていふものは師、比、大過、剝の如き是れなり。されど此れ等も亦卦象、卦德より命名の意味を發見し得ざるにはあらず。例へば師は一陽五陰を卒ゆるの象ありと見たるが故に師となせども又地中に水あるは即ち兵を農に寓するの意とも見るべく、又卦德内險にして外順なるは兵の道なりとも見るべきが如し。卦變に付いて命名したるものも亦然り。卦象、卦德より其の意味を發見し得られざるにあらず。例へ

ば隨は卦變盡より來り剛を以て柔に下る故に隨となすといふが如き最も明瞭なるものなり然れども卦德動いて説ぶなるが故に隨となす者とも見るべく又卦象長男を以て少女に下り雷澤中にあるが故に隨の意ありとも見るべし卦象卦德は極めて廣義に解せられ得るものなるが故に此くは一切の重卦(乃ち六十四卦)に應用せらるゝなり。

科學的精密の意味に於て六十四卦の名稱の附せられたるは吾人之を信ずるに能はず要するに一種の傳説として見るべきものなり然るに六十四卦の名が既に作成せられし後は何人も之を以て金科玉條となし之に由りて直ちに占はんとするものさへあるに至れり吾人の見る所を以てすれば今茲に六十四卦の形ありて新たに之れに命名すとなさんか十人十色の命名をなすなるべし。
 〇〇〇〇〇〇に就いても〇〇〇〇〇〇に就いても決して易經の名稱と一致する者にあ
 らざるべし易の名稱を其儘に信ずるは乃ち其れ丈け遙か易に囚はれたる者なり易の根本を論ずる者は命名の因りて來る所に付いて古人聯想の如何なるものなりしや心を會するあらんのみ。

第四節 六十四卦の分類

余は六十四卦を十七に分類し乃ち人生の十七方面として之を觀察するに由りて比較的満足するを得たり十七とは何んぞや今順次之を説明すべし。
 一 處世。

處世とは人間の社會に處する上の心得なり社會に處するは社會の異なるに従ふて其方針を異にすべし例へば亂世には隠れ治世には出づといへるが如く其時に従ふて異なるべきものなり其れのみならず自己の位置の異なるに従ふても亦其の方針を異にすべきとは明かなる所なり元來易の主とする所は此に在り易全体が處世訓なるとは今更ら改めて言ふ迄もなし處世は乃ち人間生活なり人間各方面の生活は直接に間接に社會と關係せざるものなし。

然るに同く處世の中に就いても戰爭とか結婚とか交際とか特別あるものあり其れ等を取り除きて先づ普通一般の場合と見るべきものを一括して茲に之を處世といふなり但だ一卦六爻あるが故に其の中の一部は此れに屬し一部は

彼れすといふが如きと少からず。従ふて之を處世又は其他の條下に配當するに
しても何卦何々爻といはざるを得ざるものあり。固より主として處世に關係あ
りといふのみにして此以外の意味なしといふにはあらざるあり。

イ 謙

謙 此卦は謙遜承順の意味あるものにして其の一々の解釋は此に之
を省く其の象に曰はく、

謙亨る君子終りあり。

と一卦六爻多く謙徳の必要なるを説く謙遜にも種類多し大に謙するもの謙
の言に見はるゝもの功勞ありて謙するもの謙を發揮すべき場合謙徳の能く天
下を得る所以大に謙するの利等之れなり一般に謙徳の大に功ある所以を明か
にしたるものなり。

賁 此卦は賁即ち飾りを意味するものにして地天泰の如く陰陽相
交るの象あり賁は山下に火あり文明にして以て止る古來之を以て天氣下降し
地氣上騰し四時行はれ百物生じ文章の見るべきものあるの意となす乃ち社會

に於て人は我が爲めにし吾は人のためにし相互に爲めにして以て天下の太平
を來たすべく人文の大なるものは是れなり乃ち人の其の文なる須らく其の心を
すべし此れ賁の卦の意なり今其の全文を引用すると左の如し。

賁亨小利有攸往

賁は亨る小しく往くところ有に利す

初九賁其趾舍車而徒

初九其趾を賁る車を捨て徒す

六二賁其須

六二其須を賁る

九三賁如濡如永貞吉

九三賁如濡如永貞吉なり

六四賁如皤如白馬翰如匪寇婚媾

六四賁如たり皤如たり白馬翰如たり寇するに匪んば婚媾せん

六五賁于丘園束帛戔々吝終吉

六五丘園を賁り東帛斐々たり吝にして終に吉なり、
上六白賁无咎、

上六白賁咎なし。

ハ  賁

此の卦は國運衰へ、君子漸く微にして只だ君臣相遇ふて、恢復を圖り、時勢の非なるに逢ふ。こは乃ち能く韜晦含藏するを明かにす。蓋し處世の道此れより大なるはなし。

遯亨小利貞

遯は亨る小しく貞なるに利あり。

初六遯尾厲勿用有攸往

初六尾に遯る厲し往攸有に用ゆること勿れ。

六二執之用黄牛之革莫之勝説

六二之を執るに黄牛の革を用ゆ之を勝て説こと莫し。

遯九三係遯有疾厲畜臣妾吉

九三係て遯る疾有り厲し臣妾を畜ふ吉なり。

九四好遯君子吉小人否

九四好して遯る君子は吉なり小人は否らず。

九五嘉遯貞吉

九五嘉にして遯る貞にして吉なり。

上九肥遯无不利

上九肥遯す利ならざるに无し。

ニ  无妄

此卦は下卦動き上卦剛、故に動いて剛健毫も偽りなしとす。故に无妄といふ。故に六爻多く无妄にして行くの道を説く。

无妄元亨利貞、其匪正有眚不利有攸往

无妄は元に亨る貞に利す其正しきに匪らざれば眚はひ有り往く攸有るに利あらず。

初九无妄往吉

初九无妄にして往けば吉なり

六二 耕穫不蕃畲則利有攸往

六二 耕穫せず舊畝せざれば則ち往く攸有るに利す。

六三 无妄之災或繫之牛行人之得邑人之災

六三 无妄の災ひ或は之が牛を繋ぐ行人の得るは邑人の災なり。

九四 可貞无咎

九四 貞なる可し咎無し。

九五 无妄之疾勿藥有喜

九五 无妄の疾は藥すること勿とも喜び有り。

上九 无妄行有眚无所利

上九は無妄行て眚ひ有り利する所なし。

ホ  頤

此卦は其の形口に似たるを以て名あり而して口は養ふ所以故に人を養ひ又は人に養はるゝ所以の道を説く。

頤貞吉觀頤自求口實

頤は貞吉なり頤を觀て自から口實を求む。

初九 含爾靈龜觀我朵頤凶

初九 爾の靈龜を舍て我を觀て頤を朵るは凶なり。

六二 顛頤拂經千丘頤征凶

六二 顛頤を顛す經に拂る丘に于いて頤なり征ば凶なり。

六三 拂頤貞凶十年勿用无所利

六三 拂頤に拂る貞凶なり十年用ゆること勿れ利する攸なし。

六四 顛頤吉虎視眈々其欲逐々无咎

六四 顛頤を顛す吉なり虎視眈々其欲逐々咎なし。

六五 拂經居貞吉不可涉大川

六五 經に拂る貞に居れば吉なり大川を渉る可らず。

上九 由頤厲吉利涉大川

上九 由て頤なふ厲きも吉なり大川を渉るに利あり。



節

此卦は其形竹の節に似たる故に名あり。而して多く節の人間に於るの義を説

節亨苦節不可貞

節は亨る。苦節は貞にすべからず。

初九不出戸庭无咎

初九、戸庭を出ず咎なし。

九二不出門庭凶

九二、門庭を出ず凶なり。

六三不節若則嗟若无咎

六三、節若せざれば則ち嗟若す咎なし。

六四安節亨

六四、安節す亨る。

九五甘節吉往有尙

九五、甘節す吉なり往て尙ふこと有り。

上六苦節貞凶悔亡

上六、苦節す貞なるも凶悔亡ぶ。

ト



大過

此卦は四陽二陰、陽勝るが故に大過といふ。恰も棟の桃むが如き感あり。故にいふ。其勢盛んなれども巽順の徳を以て悦ぶの意あり。故に六爻多く此意をいふ。

大過棟桡利有所往亨

大過は棟の桡むなり往く所有るに利す亨る。

初六藉用白茅无咎

初六、藉くに白茅を用ゆ咎なし。

九二枯楊生梯老夫得其女妻无不利

九二、枯楊梯を生ず老夫は其女妻を得て利せざることなし。

九三棟桡凶

九三、棟の桡む凶なり。

九四棟隆吉有它吝

九四隆なり吉なり它有れば吝なり。

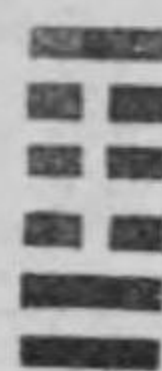
九五枯楊生華老婦得其士夫无咎无譽

九五枯楊華を生ず老婦は其士夫を得咎もなく譽もなし。

上六過涉滅頂凶无咎

上六過て渉る頂きを滅す凶なり咎なし。

子 損



損

此卦は下を損して上を益するの意ありとす。故に多く處世の道を説く。損有孚。元吉。无咎。可貞。利有攸往。曷之用。二簋可用亨。

損は孚有り元吉なり咎なし貞にすべし往く攸有るに利あり曷をか之を用いん。二簋用て亨す可し。

初九已事速往无咎酌損之

初九事を已て速やかに往ば咎無し酌で之を損す。

九二利貞征凶弗損益之

九二貞に利あり往ば凶なり損せずして之を益す。

六三三人行則損一人行則得其友

六三三人往ば則ち一人を損す一人行ば則ち其友を得。

六四損其疾使速有喜无咎

六四其疾を損す速かなり使す喜び有咎無し

六五或益之十朋之龜克違元吉

六五或は之を益す十朋之龜も違ふ能はず元吉

上九弗損益之无咎貞吉利有攸往得臣无家

上九損せずして之を益す咎なし貞にして吉なり往く攸有るに利す臣を得家無し

り 益此卦は損の反對なるが故に名く。

益利有攸往利涉大川

益は往く攸有るに利あり大川を渉るに利あり。

初九利用爲大作元吉无咎

初九用つて大作を爲すに利あり元に吉なり咎無し。

六二或益之十朋之龜弗克違永貞吉王用亨于帝吉

六二或は之を益す十朋の龜も違ふ克はず永貞吉なり王用つて帝に亨す吉

六三益之用凶事无咎有孚中行告公用圭

六三之に益に凶事を用てす咎無し中行に孚有て公に告るに圭を用ふ。

六四中行告公從利用爲依遷國

六四中行公を告ぐ從つて用つて依ることを爲し國を遷すに利あり。

九五有孚惠心勿問元吉有孚惠我德

九五有孚ありて惠心問ふことなくして元吉孚ありて我德を惠とす。

上九莫益之或擊之立勿恤凶之を益すことなく或は之を擊つ心を立ることなし凶。

又  萃

萃とは聚まるなり先王祭祀を明かにし以て天下の人を集む。

萃亨王假有廟利見大人亨利貞用大牲吉利有攸往

萃は亨王る王有廟に假る大人を見るに利し大牲を用て吉往く攸有るに利し。

初六有孚不終乃亂乃萃若號一握爲笑勿恤往无咎

初六孚有り終らず乃ち亂れ乃ち萃る若號ふときは一握笑を爲す恤ふこと勿れ往て咎無し。

六二引吉无咎孚乃利用福

六二引て吉咎無し孚あれば乃ち福を用るに利し。

六三萃如嗟如无利往无咎小吝

六三萃如嗟如利する攸無し往は咎無し小しく吝。

九四大吉无咎

九四大吉にして咎無し。

九五萃有位无咎匪孚元永貞悔亡

九五萃るに位有り咎無し孚あるに匪す元永貞にて悔亡ぶ。

上六齋沓涕洟无咎

上六齋沓涕洟す咎なし。

第五節 順 境

順境に處するの道は自ら逆境に處すると異なるものあり。

イ  泰

泰は安しといふ意。卦象地氣上昇在天天氣下降し天地相交り陰陽和合す。卦徳内剛健にして外柔順。何れにして泰なる所以なり。小は陰三を指し、大は陽三を指す。小去り大來る故吉にして、享らざるとなし。筮者此の如き心になり一家此の如き狀を呈すれば吉ならざるとなし。然れども長く此狀を維持するとは困難なり。故に此卦多くは變通處世の道を説く。

初九は微賤なれども天下泰平の時運に乗じて進まんとするもの、然れども獨りて進まず、同輩と共にせんとすると恰も茅を抜くときは根が次第に抜けて行くが如し。其の心掛善なり。故に立身出世の道にありても可なり。九二は剛中の者故荒を包ぬるといふて荒れたり穢れたるものをも兼ぬるの度量あり。其上決斷の宜きと河を徒渉するが如し。又退といふて遠くに居るものをも遺すとなく、人才を擧げ用ひ、明黨することなければ中正の行に合するを得。尙は合するといふことなり。九三は既に泰の卦の半になる故易は時勢の變を戒む。陂は傾くといふ

となり。艱を知りて貞にし居れば咎なし。孚は期待するとなり。期待することを憂へざるも必ず福祿あるべし。六四は陰にて上に居り柔順の人なり。故に退かんとす。之を形容して然かいふ。其鄰を以てすとは三陰皆四のために感化せらるゝなり。其の心は自ら通すべし。六五は九二に信頼するもの、其狀帝乙の妹が諸侯に嫁して驕らざる如し。家の祭りをなして元吉を得るとなり。上六は泰平の終らんとするもの故戒めを違ふ。隍とは城を作るために土を取りて出來たる堀をいふ。城が頽れて土が隍に返へる。命令天子より出でず人民諸侯より出づ。如何に正道を守るも凶なり。

泰小往大來吉亨

泰は小往いて大來る吉にして亨る。

初九拔茅茹以其彙征吉

初九茅を抜き茹す其彙を以てす、征けば吉。

九二包荒用馮河不遐遺朋亡得尙于中行

九二荒を包み馮河を用ふ、遐遺せず、朋亡ぶ、中行に向ふを得。

九三无平不陂、无往不復、艱貞无咎、勿憂其孚、于食有福。

九三平の陂せざるなく、往の復らざるなし、艱貞咎なし、其孚を憂ふる勿れ食に于て福有り。

六四翩翩不富、以其鄰不戒、以孚。

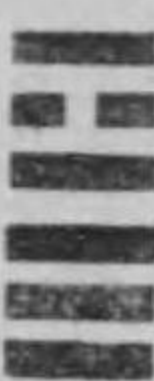
六四翩翩として富まず、其鄰を以てす、戒めず、以て孚あり。

六五帝乙歸妹、以祉元吉。

六五帝乙妹を歸ぐ、以て祉あり、元吉。

上六城復于隍、勿用師、自邑告命、貞吝。

上六城隍に復す、師を用ふる勿れ、邑より告命す、貞なれども吝。

大有  大有

大有とは大を有するなり。大は陽を指す。此卦一陰五陽陰之れが主たるの意あり。故に大を有すと云ふ。而して多く大有の時に處するの道を説く。

大有元亨

大有は元に亨る。

初九无交害、匪咎、艱則无咎

初九害に交ふるなし、咎匪し、艱なれば咎なし。

九二大車以載、有攸往、无咎

九二大車以て載す、往く所あるも咎無し。

九三公用亨于天子、小人弗克

九三公用て天子に亨く、小人は克はず。

九四匪其彭、无咎

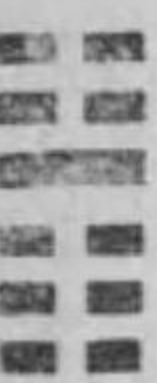
九四其彭に匪ざれば咎なし。

六五厥孚交如、威如吉

六五厥の孚交如す、威如す吉なり。

上九自天祐之、吉无不利

上九天より之を祐く吉にして利からざるなし。

八  豫

此卦は一陽あれども柔順、他は皆陰、故に柔順の義あり。又内卦は順にして外卦

は動く、即ち安樂の意あり。六爻多く安樂に處するの道を説く。

豫利建侯行師

豫は侯を建て師を行るに利し。

初六鳴豫凶

初六鳴豫す凶なり。

六二介于石、不終日、貞吉

六二石に介して日を終へず、貞なれば吉。

六三盱豫悔遲有海

六三盱豫す、海遅ければ悔有り。

九四由豫大有得、勿疑、朋盍簪

九四由豫す、大に得ること有り、疑ふ勿れ、明盍簪す。

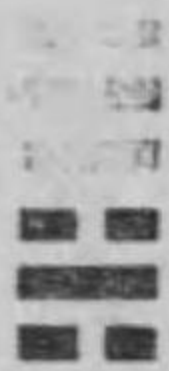
六五貞疾、恒不死

六五貞疾、恒なり、死せず。

上六冥豫、成有渝、无咎

上六冥豫す、成れどもは渝ること有り、咎なし。

二



解

此卦は陷て動く、故に吹を解するの意ありとなす。又雷雨交々至る、故に解くの義ありとなす。

解利西南、天所往、其來復、吉、有攸往、夙吉

解は西南に利あり、往く所なし、其來り復して吉なり、往く攸有ば夙に吉なり。

初六无咎

初六咎なし。

九二田獲三狐、得黃矢、貞吉

九二田して三狐を獲たり、黃矢を得、貞なれば吉なり。

六三負且乘、致寇至、貞吝

六三負ふて且つ乘る、寇の至を致す、貞なれば吝なり。

九四解而拇、朋至斯孚

九四而の拇を解けば朋至て斯に孚なり

六五君子維有解吉有亨于小人

六五君子維れ解くこと有り吉なり小人に孚有り。

上六公用射隼于高墉之上獲之无不利

上六公用に隼を高墉之上に射る之を獲て利せざるることなし。

ホ 豐

此卦は内明にして外動雷あり火あり盛大の意あり故に名づく而して多く豊に居るの道を説く。

豐亨王假之勿憂宜日中

豐は亨る王之を假る憂ふる勿れ日中に宜し。

初九遇其配主雖旬无咎往有尙

初九其配主に遇す旬と雖も咎なし往いて尙ふこと有り。

六二豐其蔀日中見斗往得疑疾有孚發若吉

六二其の蔀を豊にす日中斗を見る往いて疑疾を得孚有り發若吉なり。

九三豐其沛日中見沫折其右肱无咎

九三其沛を豊にし日中沫を見る其右肱を折る咎なし。

九四豐其蔀日中見斗遇其夷主吉

九四其の蔀を豊にす日中斗を見る其の夷主に遇ふ吉なり。

六五來章有慶譽吉

六五章を來せば慶譽有り吉。

上六豐其屋蔀其家闕其戸闕其无人三歲不覿凶

上六其屋を豊にし其家を蔀し其戸を闕う闕として人なし三歲覿せず凶。

へ 既濟

此卦は水火上にあり相濟す故に名あり。

既濟亨小利貞初吉後亂

既濟は亨る小しく貞なるに利し初吉にして後亂る。

初九曳其輪濡其尾无咎

初九其輪を曳いて其尾を濡ほす咎なし

六二婦喪其茀逐七日得

六二婦其謁を喪ふ、逐ふ勿れ、七日にして得。

六三高宗伐鬼方、三年、克之、小人勿用。

六三高宗鬼方を伐つ、三年にして之に克つ、小人は用ふる勿れ。

六四繻有衣紵、終日戒。

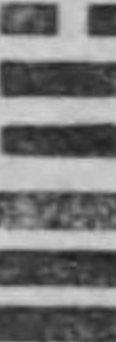
六四繻に衣紵あり、終日戒む。

九五東隣殺牛、不如西隣之禴、祭實受其福。

九五東隣牛を殺すは西隣の禴祭して實に其福を受くるに如かず。

上六濡其首、厲。

上六其首を濡す、厲。

ト  夬

此卦は陽氣下より上りて將さに上の一陰を決せんとす。故に名あり。而して其の時勢は極めて盛んなるものとなす。

夬揚于王庭、孚號有厲、告自邑、不利即戎、利有攸往。

夬は王庭に揚る、孚に號ぶ、厲きこと有り、邑より告ぐ、戎に即くに利からず往

く攸有るに利し。

初九壯于前趾、往不勝、爲咎。

初九前趾に壯なり、往て勝たず咎と爲す。

九二惕號、莫夜有戒、勿恤。

九二惕れて號ぶ、夜戒有ること多し、恤ること勿れ。

九三壯于頄、有凶、君子夬夬、獨行遇雨、若濡、有愆、无咎。

九三頄に壯なり、凶有り、君子夬々、獨行雨に遇ふ、无ふが若く温ること有り、咎なし。

九四臀无膚、其行次且、羊悔亡、聞言不信。

九四臀に膚なし、其行次且たり、羊を牽きて悔亡ぶ言を聞て信せず。

九五覓陸夬夬、中行、无咎。

九五覓陸夬々、中行咎なし。

上六无號、終有凶。

上六號ぶことなし、終に凶有り。

子 兌



此卦は上六共に兌故に名あり。而して悦ぶ所以のを説く。

兌亨利貞

兌は亨る、貞に利あり。

初九和兌吉

初九和して兌ぶ吉なり。

九二孚兌吉海亡

九二孚ありて兌す、吉なり、海亡ぶ。

六三來兌凶

六三來り兌ぶ、凶なり。

九四商兌未寧介疾有喜

九四兌こびを商りて寧からず、介疾は喜び有り。

九五孚于剝有厲

九五剝に孚あり、厲き有り。

上六引兌

上六引て兌こぶ。

リ 渙



此卦は風あり、水あり渙然として氷釋するの感あり。故に名づく。而して多く渙然たるの意を説く。

渙亨王假有廟利涉大川利貞

渙は亨る、王有廟に假る、大川を渉るに利あり、貞に利あり。

初六用拯馬壯吉

初六用て拯ふ、馬壯なれば吉なり。

九二兌奔其机悔亡

九二兌するに其机に奔る、悔亡ぶ。

六三兌其躬无悔

六三其躬を兌す、悔なし。

六四兌其群元吉兌有丘匪夷所思


六四其群を渙す、元に吉なり、渙して丘のごとき有り、夷の思ふ所に匪す。

九五渙汗其大號、渙、王居无咎

九五の時其大號を汗にす、渙の時王居て咎なし。

上九渙其血去逖、出、无咎

上九其血を渙す、去て逖げ出づ咎なし。

ト  臨

此卦は陽氣の將さに盛んならんとするの意、故に臨といふ。即ち盛んならんとするに臨むの義なり、而して多く、將さに盛んならんとするの義を説く。

臨元亨利貞、至于八月有凶

臨は元に亨る、貞に利し、八月に至りて凶有り

初九咸臨、貞吉

初九咸臨す、貞なれば吉なり、

九二咸臨、吉、无不利

九二咸じて臨む、吉なり、利せざるることなし。

六三甘臨、无攸利、既憂之、无咎

六三甘臨す、利する攸なし、既に之を憂ふ无なし

六四至臨、无咎

六四至りて臨む、咎なし。

六五知臨、大君之宜、吉

六五知にして臨む、大君の宜しきなり、吉なり。

上六敦臨、吉、无咎

上六は敦く臨む、吉にして咎なし。

第六節 愛撫

愛撫は即ち人民を愛撫する所以なり、多く此れに關するの卦を列す。

イ  比

五、陰一陽に親む故に名あり、親は公ならざるべからず、六爻多く人と親比するの道を説く、真心を以てすべく其人を擇ぶべし、親むべきを親み或は公平に親む。

或は親むの道を終ふべし。

比吉、原筮、元永貞、无咎、不寧方來、後夫凶。

比は吉、原筮して元永貞にして、咎なし、寧からざる方に來る、後るる夫は凶なり。

初六有孚比之、无咎、有孚盈缶、終來、有他、吉。

初六孚有り、之に比す、咎なし、孚有り、缶に盈つ、終に來り、他の吉有り。

六二比之自内、貞吉。

六二之を比す、内よりす、貞吉。

六三比之匪人。

六三之に比す、人に匪す。

六四外比之、貞吉。

六四外之に比す、貞吉。

九五顯比、王用三驅、失前禽、邑人不誠、吉。

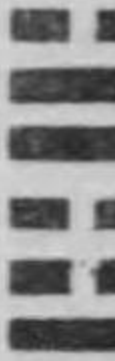
九五顯に比す、王用て三たび驅つて前禽を失ふ、邑人誠めず、吉。

上六比之、无首、凶。

上六之を比す、首なし、凶。

第七節 交 際

交際の人に於る最も重んぜざる可らず。或は小人に逢ふともあり。或は婦人の來るに逢ふともあり。一に拘泥す可らず。而も身を處する最も慎まざるばあらず。

イ  隨

此卦は内動いて巽順なるが故に名あり。而して多く人に隨ふの利害可否如何を説く。

隨元亨利貞、无咎。

隨は元亨利貞に利し、咎なし。

初九官有渝、貞吉、出門交、有功。

初九官渝ることあり、貞なれば吉門を出で、交はれば、功有り。

六二係小子、失丈夫。

六二小子に係り、丈夫を失ふ。

六三係丈夫、失小子、隨有求得、利居貞。

六三丈夫に係り、小子を失ふ。隨て求むる有りて得、貞に居るに利し。

九四隨有獲、貞凶、有孚、在道、以明、何咎。

九四隨て獲ること有り、貞なれば凶、孚有り、道に在つて以て明、何の咎あらん。

九五孚于嘉、吉。

九五嘉に孚あり、吉。

上六拘係之、乃從維之、王用亨于西山。

上六拘係す、乃從つて之を維ぐ、王用つて西山に享す。

□ 同人

此卦は天の下に火あり。天は陽、火は炎上す。相ひ同ふするの義あり。故に名づく。而して多く實際の道をいふ。

同人、晦野、亨、利、涉大川、利、君子貞。

同人、野に晦てす、亨る、大川を渉るに利し、君子の貞に利し。

初九同人于門、无咎。

初九同人門に干てす、咎なし。

六二同人于宗、吝。

六二同人宗に干てす、吝なり。

九三伏于戎莽、升其高陵、三歲不興。

九三戎に莽に伏す、其高陵に升る、三歲興らず。

九四乘其墉、弗克攻、吉。

九四其墉に乗る、攻ること克はず、吉なり。

九五同人先號咷、而後笑、大師克相遇。

九五同人先に號咷して而して後に笑ふ、大師克て相遇ふ。

上九同人于郊、无悔。

上九同人郊に干てす、悔なし。

ハ 咸

咸とは感なり。止まつて悦ぶ。咸通の義あり。故に多く咸通の義を説く。咸亨、利貞、取女吉。

咸は亨る、貞に利し、女を取りて吉なり。

初六咸其拇

初六其拇に咸す。

六二咸其腓、凶居吉

六二其腓に咸す。凶なり。居れば吉なり。

九三咸其股、執其隨、往吝

九三其股に咸す。執て其れ隨ふ。往ば吝し。

九四貞、悔亡、憧々往來、朋從爾思

九四貞、悔亡。憧々往來。朋從爾思。

九五咸其脢、无悔

九五其脢に咸す。悔なし。

上六咸其輔頰、古

上六は其輔頰古に咸す。

二 姤



姤

此卦は一陰の下に長じ、次第に陽を犯すの象、最も戒めざる可らざるなり。假令ひ交際にあらざるも、多く男女相ひ交るの道を説くなり。

姤女壯勿用取女

姤は女壯なり。女を取るに用ふる勿れ。

初六繫于金柅、貞吉、有攸往、見凶、羸豕孚蹢躅

初六金柅に繫ぐ。貞なれば吉。往く攸有れば凶を見る。羸豕の孚あり。蹢躅。

九二包有魚、无咎、不利賓

九二包に魚有り。咎なし。賓に利しからず。

九三臀无膚、其行次且、厲无大咎

九三臀に膚なし。其行次且す。厲けれども大咎なし。

九四包无魚起凶

九四包に魚なし。起れば凶なり。

九五以杞包瓜、含章、有隕自天

九五杞を以て瓜を包む。章を含む。隕ること有り。天よりす。

上九姤其角吝无咎
上九姤其角吝吝咎なし。

第八節 教育

教育のとたる大なり。先王の時制度備はらずと雖も而も猶教育を重んずるは書語に明かなり。曰はく教育子と以て見るべきなり。今教育に關するものを列擧す。

イ  蒙

蒙は蒙昧の意。卦象、山の下に水あり。水、山に向て流るれば行く處なし。卦徳内坎にして、外止る。陷に止るの意あり。共に蒙と名くる所以なり。蒙昧は即ち童蒙の如し。故に多くは童蒙教育の道を説く。

蒙亨了匪我求童蒙、童蒙求我、初筮告再三瀆、々則不告、利貞
蒙は亨る、我童蒙に求むるに匪ず、童蒙我に求む、初筮は告ぐ、再三すれば瀆る瀆るれば則ち告げず、貞に利し。

初六發蒙、利用刑人、用說桎梏、以往吝

初六蒙を發す、人を刑するに用るに利し、桎梏を説くに用ふる、以て往く、吝。

九二包蒙、吉、納婦、吉、子克家

九二蒙を包むは吉、婦を納るは吉、子家を克くす。

六三勿用取女、見金夫、不有躬、无攸利

六三女を取るに用ふる勿れ、金夫を見て躬を有たず、利する攸なし。

六四困蒙吝

六四蒙に困む、吝。

六五童蒙吉

六五童蒙、吉なり。

上九擊蒙不利、爲寇、利禦寇

上九蒙を撃つ寇を爲すに利し、からず、寇を禦ぐに利し。

第九節 家庭

家庭は支那の如き家族制度にありては最も重んずる所也。先王の時、今日所謂家族なるものなく、唯氏族あるのみなりしと雖も、家族の次第に發生せんごせしこと及び家族的意味の當時に存在し、親子兄弟の別ありしとは明かなり。

イ 蠱



山下に風あり、風山に逢ふて亂るゝの象なり。即ち事ある所以なり。蠱は事あるなり。亂るゝなり。而かも巽にして止まる。故に能く物を止む。家庭のことたる實に天下太平の基なり。故に聖人此卦に於て家庭のことを示すといふ。

蠱元亨利涉大川、先甲三日、後甲三日。

蠱は元亨、大川を渉るに利し、甲に先づこと三日、甲に後るゝこと三日。

初六幹父之蠱、有子考、无咎、厲終吉。

初六父之蠱を幹す、子有り考、咎なし、厲なれども終に吉。

九二幹母之蠱、不可貞。

九二母の蠱を幹す、貞にす可からず。

九三幹父之蠱、小有悔、无大咎。

九三父の蠱を幹す、小しく悔有り、大咎なし。

六四裕父之蠱、往見吝。

六四父之蠱を裕く、往けば吝を見る。

六五幹父之蠱、用譽也。

六五父の蠱を幹す、用て譽あり。

上九不事王侯、高尚其事。

上九王侯に事へず、其事を高尚にす。

家人



此卦は長女と中女との順を正ふするもの、最も家庭の意あり。

家人、利女貞。

家人は女の貞に利あり。

初九閑有家、悔亡。

初九は家有るを閑す、悔亡ぶ。

六二无攸遂、在中饋、貞吉。

- 六二遂る攸なし。中饋に在り、貞吉。
- 九三家人嗃々、悔厲吉、婦子嘻嘻、終吝。
- 九三家人嗃々たり、悔ゆれば厲けれど吉なり、婦子嘻嘻たり、終に吝なり。
- 六四富家大吉。
- 六四家を富す、大に吉なり。
- 九五王假有家勿恤吉。
- 九五王家有るを假る、恤ること勿れ、吉なり。
- 上九有孚威如終吉。
- 上九孚ありて威如すれば終に吉なり。

第十節 結婚

人生の大事、結婚より大なるはなし。古今東西一様に之れならざるなし。婦を還らぶの要ある所以なり。結婚の條を擧ぐ。

イ  歸妹

卦たるや、少女を以て長男に従ふ。故に結婚の義あり、聖人此卦は於て結婚の義を示めさんとす。

- 歸妹征凶无攸利
- 歸妹征けば凶利する攸なし。
- 初九歸妹以娣、跛能履、征吉。
- 初九歸妹、娣を以てす、跛能く履む、征けば吉。
- 九二眇能視、利幽人之貞。
- 九二眇能く視る、幽人の貞に利し。
- 六三歸妹以須、反歸以娣。
- 六三歸妹、須を以てし、反歸娣を以てす。
- 九四歸妹愆期、遲歸有時。
- 九四歸妹、期を愆る、遅れ歸ぐ時有り。
- 六五帝乙歸妹、其君之袂不如其娣之袂良、月幾望、吉。
- 六五帝乙妹を歸ぐ、其君の袂は其の娣の袂の良きに如かず、月望に幾し、吉。

上六女承筐无實士刲羊无血无攸利

上六女筐を承けて實なく、士羊を刲て血なし利する所なし。

第十一節 旅行

旅行のことたる支那と雖も多く之れあり。但だ其の方法の極めて不完全なるのみ。先王旅行の避く可らざるを以て但だ其の道を示めさんとす。

イ  旅

此卦艮止つて、而して明かなり。其状恰も旅して外に在り、明者を得て之れに依るが如し。故に名く、而して多く旅行の義を示めすとす。

旅小亨旅貞吉

旅は小しく亨る旅は貞なれば吉

初六旅瑣々其所取災

初六旅瑣々として其の取る所災あり。

六二旅即次懷其資得童僕貞

六二旅は次に即く、其の資を懷ひ、童僕の貞を得

九三旅焚其次喪其童僕貞厲

九三旅は其次を焚き、其の童僕を喪ふ、貞なれども厲し。

九四旅于處得其資斧我心不快

九四旅處に于す、其資斧を得て、我心快からず。

六五射雉一矢亡終以譽命

六五雉を射て一矢亡ふ、終に以て譽命あり。

上九鳥焚其巢旅人先笑後號咷喪牛于易凶

上九鳥其の巢を焚く、旅人先づ笑つて後號咷す、牛を易に喪ふ凶なり。

第十二節 牽制

人の世に在るや、或は小人のために妨げられ、或は婦人のために制せらるる、其者小と雖も我に關すること極めて大なるものあり。先王吾人の牽制せらるるものあるを見、之れに應ずる所以の道を示す。

イ 小畜

陰は小なり。一陰五陽の中にあリ。五陽一陰を見て争ふ、乃ち却つて制かる所となる。小の畜ふる所以なり。

小畜亨密雲不雨自我西郊

小畜は亨る、密雲雨ふらず、我西郊よりす。

初九復自道何其咎吉

初九復ること道よりす、何ぞ其咎あらん吉。

九二牽復吉

九二牽いて復す、吉。

九三輿説輻、夫妻反目

九三輿輻を説く、夫妻目を反す。

六四有孚血去惕出无咎

六四孚有り血み去る惕れ出づ咎なし。

九五有孚攣如富以其隣

九五孚有り攣如す富其隣を以てす。

上九既雨既處尚德載婦貞厲月幾望君子征凶

上九既に雨ふり既に處る德を尙むで載す婦貞なれども厲し月望に幾し君子征ば凶

ハ 大畜

内卦乾剛、而して外卦艮止、之を阻止せんとす、能く大を畜ふ故に名あり、而して廣く牽制の意を説く。

大畜利貞、不家食、吉利涉大川。

大畜貞に利し家食せず、吉、大川を渉るに利し。

初九有厲利已

初九厲きこと有り、已むに利し。

九二輿説輻

九二輿は輻を説く。

九三良馬逐利艱貞、日閑輿衛、利有攸往

九三良馬逐ふ艱貞に利し、日々輿衛を閑にす、往く所あるに利し。

六四童牛之牲元吉

六四童牛の牲元吉

六五豮豕之牙吉

六五豮の牙を齧す吉

上九何天之衢亨

上九何ぞ天の衢ある亨る。

第十三節 刑 罪

五刑の屬三千罪は不孝より大なるはなし。先王の刑罰を重んずるや大也。三百八十四爻刑罰に言及するもの少からず。今その最なるものを擧ぐ。

イ



噬嗑

噬嗑は嚼むなり。卦形上下二陽爻は口形に類し、中の一陽爻は食物の其中に在るに類す。故に名く動いて明かなり。以て獄を斷すべし。六爻多く獄を斷するの道を説くといふ。

噬嗑亨利用獄

噬嗑は亨る獄を用ふるに利し。

初九履校滅趾无咎

初九校を履し趾を滅す咎なし。

六二噬膚滅鼻无咎

六二膚を噬み鼻を滅す咎なし。

六三噬腊肉遇毒小吝无咎

六三は腊肉を噬で毒に遇ふ、小く吝し咎なし。

九四噬乾肉得金矢利艱貞吉

九四乾肉を噬み、金矢を得たり、艱貞に利し、吉なり。

六五噬乾肉得黄金貞厲无咎

六五乾肉を噬で黄金を得たり、貞なれば厲けれども咎なし。

上九何校滅耳凶

上九校を何ふて耳を滅す、凶なり。